

## 我々の「日本政治史」の政治的意味——はしがきにかえて

我々二人の文字通りの共同編集・共同著作である『日本政治史講義——通史と対話』を、満を持して世に送る。近代一五〇年の日本の政治をトータルに理解する試みは、実は難しい。我々もそれぞれに研鑽けんさんを積みながら、ようやく披露できる段階にまで来たとの思いが強い。

そもそも二人の狭義の伝統的専攻分野は、御厨貴が「日本政治史」、牧原出が「行政学」であり、一昔前なら相互乗り入れの教科書の作成など想像だにできなかったであろう。それがなぜ可能になったのか。それは、この三十年間の学問の発展史を眺めれば、容易に理解できる。

今を去ること三十年余り前、平成が始まった頃に、一つの学問横断的な方法が御厨によって提唱された。名づけて「オーラル・ヒストリー」。その発展ふりは同じく御厨が編者を務め牧原も参加している『オーラル・ヒストリーに何ができるか——作り方から使い方まで』（岩波書店、二〇一九年）を手にとってもらえば、すぐにわかる。その中で執筆者の一人である日本政治史研究者・村井良太氏に評する（村井良太「撰取世代の見たオーラル・ヒストリー 東京学派四半世紀のヒストリー——デモクラシーと現代史の好循環を目指して」御厨貴編『オーラル・ヒストリーに何ができるか』岩波書店、二〇一九年、九六〜九七頁）。

東京学派（著者は「公人の、専門家による、万人のための口述記録」という御厨の定義を出発点としている、とする）の取り組みは日本の政治文化、社会文化を確かに変えてきた。

東京学派は政治学と歴史学を架橋し、政治研究と現代史、ジャーナリズムとアカデミズムを聞き取りで

結ぶ学術運動であると同時に、ひとつの文化運動でもあった。

実は御厨がオーラル・ヒストリーを始めた頃から、牧原は参加して共通の体験をしてきた。前編著の中で、同じく執筆者の一人である行政学者・金井利之氏は「同時に参加することになった牧原出氏」が「助手論文の執筆途上の時期からオーラルに接していたことは、同氏の研究者キャリアにとって、大きな意味をもたらした」と書いている（金井利之「オーラル・ヒストリーからの／への逃走」同右、三〇頁）。まさにオーラル・ヒストリーが、御厨と牧原の歴史解釈や政治分析のベースをなしているのだ。だからこそ、お互いに狭い専門領域を越境して、「日本政治史」の教科書作成における共同作業が可能になったのである。

さて御厨は、五大学遍歴の経験を有するが、最初の早すぎる最終講義を東京都立大学で行った際（一九九九年一月）、「政治学におけるメディアの効用」を指摘し、オーディオ・ビジュアル（AV）と書き言葉とが半々の形になる「日本政治史」のテキストを作ることを予言している（御厨貴「日本政治史よ、何処へ行くと——東京都立大学最終講義・補遺」『政治へのまなざし』千倉書房、二〇一二年、七一頁）。二十年近くに及ぶ都立大での講義は、学生に「すぐ脇にそれる」と評されたように、毎年「通史よどこへ行ったか」と言わんばかりの七転八倒の連続で、年度末には敗退の気分であった。だが、退職前の五年間、AV教室で自らを作った、日本の近現代史を映像でたどるAV教材（「我々の創った社会資本・都市・制度」〈現代日本の形成過程〉二七〜三九巻）丸善、一九九四年）を用いることによって、しゅうひ愁眉を開きつつあった。

都立大での予言が、その後現実のものとなったのは、二〇〇二年、放送大学の天川晃氏から、放送大学のテレビ科目で初めて「日本政治史」の授業を作るので、いっしょに担当しないかという誘いを受けての

ことであつた(天川晃・御厨貴「日本政治史——20世紀の日本政治」放送大学教育振興会、二〇〇三年)。テレビで流す放送教材を先に作つてから印刷教材を作るという習慣は、ここで身についた。放送大学では、印刷教材が先で放送教材は後というやり方を常としていた。これは印刷教材が主で、放送教材は従という伝統的な考え方によるものである。御厨は、これでは教材相互がうまくマッチングしないと考え、各章ごとで異なる思ひぬ味わいを引き出すために、あくまでも放送教材を先に作るという自らのやり方を貫き、それが成功したと思つている。さて、それから四年経つた後、御厨は二度目の教科書作成にあつて、牧原を誘つた。天川・御厨・牧原の三人でチームを組んで作成した教科書は、六年間使われた(天川晃・御厨貴・牧原出「日本政治外交史——転換期の政治指導」放送大学教育振興会、二〇〇七年)。その六年が過ぎようとする頃、二〇一一年に天川氏が放送大学を定年退職し、一二年には御厨が東京大学先端科学技術研究センター(東大先端研)を同じく定年退職して放送大学へ、さらに一三年には牧原が東北大学から東大先端研へと異動した。こうした三人の玉突き人事が契機となつて、天川氏を顧問格としながら、御厨・牧原による「日本政治史」への三度目の挑戦がなつた。この三度目の教科書も、二〇一三年から六年間使われた(御厨貴・牧原出「日本政治外交史〔改訂版〕」放送大学教育振興会、二〇一三年)。さすがに三度目の正直とはよく言つたもので、印刷教材、放送教材ともに満足のいくレベルに到達したように思う。

有斐閣が「日本政治史」の教科書を依頼してきたのは、まさにこの時期だったので、放送大学での授業が閉講するまで六年間待つてもらつた。従来、放送大学の教材を一般書籍化する場合、対象となるのは印刷教材に限られ、折角の放送教材はそれつきりお目見えしないのが普通であつた。我々二人は、オーラル・ヒストリーの経験から映像がなくても放送教材は十分に話し言葉で通ずると考え、最初の数回を、オーラルのテープ起こしのプロ集団に依頼し、話し言葉での実験版を作つてみた。結果は、これはいけると

いう判断になった。印刷教材ではどうしても伝えきれない歴史の「気分」や「時代感覚」については、放送教材の二人の対話の「味」から理解が及ぶことになるからだ。そこで、二〇一八年度で放送大学の授業が閉講となるや、有斐閣の編集者の岩田拓也氏に放送教材の話し言葉での文字起こしを頼み、一年をかけて、それが完成した。ここまできて、いよいよ本格的な編集作業に入るに至った。まさにコロナ禍の二〇二〇年に、三者のテキストづくりは最終段階を迎えたのであった。

次に本書の構成のあり方と読み方についてふれておこう。本書の扱う範囲は、まさに近代一五〇年、明治維新からコロナ禍の二〇二一年までである。「日本政治史」の領域は時間も空間もほとんど広がるばかりだ。今から半世紀前、御厨が東京大学法学部で聴いた「日本政治外交史」の講議では、幕末・維新时期から始まり日露戦争後までで止まっていた。この五十年で、少しずつその範囲を今の時代に近いところまで進めてきた。本書では、戦前期に六章分、戦後・昭和期に六章分、平成期に四章分があてられている。最後の第16章は、本書の基となった放送大学教材にはなく、今回の編集過程で追加した。その章の対話編は、まさにコロナ禍の社会のあり方を象徴するように、御厨と牧原がオンラインで対話するかたちで収録された（二〇二〇年十二月二十一日収録）。

本書は結構なページ数があるし、どう読み進めればよいのだろうか。各章いずれも書き言葉の通史編と話し言葉の対話編とから成っている。筋だけをとにかく手っ取り早くつかみたいという場合は、通史編の通読だけで十分だろう。歴史の「多様性」とか「匂い」とか「手ざわり感覚」とか、その余白の部分を十分に味わいたい向きには、対話編の味読がおすすめである。さらに内容の理解を深めたい人は、各章の「参考文献」、それからこの十年の新刊書に手を伸ばしたい人には、巻末の「読書案内」にあたってみても

らいたい。

では、令和の時代から先はどうすればよいのだろうか。御厨も牧原も、さまざまなメディアで今の政治を話し論ずる機会が多いので、それを見てもらうと、この先の一手がわかるかもしれない。

「日本政治史」と言いながら、なぜ「今」をわかりたいと求めるのか。なぜ「未来」を確認したいと欲するのか。それは平成三十年間に起きた日本のあらゆる側面での構造的変動の行く末が未だに見えないからに他ならない。戦前期は「富国強兵」と「脱亜入欧」、戦後・昭和期は「戦後復興」と「高度成長」のように、時代を画する言葉がはっきりとしていた。だが、平成の三十年はどうだ。一つには「自然災害」多発の時代であった。だがそれも実は、二〇一一年に起こった東日本大震災からの「災後」の時代の前後でわけられるのか否か。さらに、御厨が同時代を「戦後」が終わり「災後」が始まる」と規定した通りだったのか否か。

しかも平成の天皇は、二〇一一年の東日本大震災を機に国民、被災者に寄り添うビデオメッセージを発し、その成功体験の上に一六年、「天皇退位」のビデオメッセージを発し、自らの判断通り、退位による平成の幕引きを執行してしまった。強制的に遮断された平成の後に、令和が元号となる時代が幕を明けた。しかし自然災害は収まることなく、しかも令和の時代の幕開けとともに、コロナ禍が日本を、そして世界を襲うようになった。政治的には平成の政治改革、行政改革は思うような果実をもたらさず、再び自民党長期政権の時代に戻ってしまった。しかもそれは、以前よりもっと分断と対立を明確にし、言葉による政治を喪失させてしまった。

そこはかといふ不安に陥りながら、日本国民は先の見えぬ構造的変革の進む中、ただただ佇たたくんでいる現

状にある。ともすれば不安で居ても立ってもいられないあなたに、我らの「日本政治史」は、そつとささやくであらう。

落ち着いてこの国の近代の歴史を繙ひもといてみようではありませんか。この国の政治社会をリードしたプロフェッショナルの生き方にふれてみようではありませんか。そして、この国が変動と安定の周期を繰り返す中であつて、常に変わるものと、変わらざるものが何であつたのかを探り当ててみましょう。

今をわかること、未来への展望を見出すこと。それには歴史的思考を強靱なものにしていくしか方法はありません。

さあ、我々二人の案内する「日本政治史」の航海に、常に批判的精神を失うことなく、思い切つて乗り出してみようではありませんか。

二〇二一年一月

コロナ禍の最中であつて

御厨 貴  
牧原 出

## 目次

我々の「日本政治史」の政治的意味——はしがきにかえて

i

### 第1章 日本政治と政治史学

一 日本における近代国家の形成 1

二 太平洋戦争の前と後 3

三 通史・評伝とリーダーシップ・外交 8

#### 対話編

13

本書の構成 13 現場を訪ねる 15 史料から読み解く 17

用 20 公文書を読む——沖縄県公文書館 23 政治史学とは 27

i

### 第2章 戊辰戦争と西南戦争

一 開国と維新 31

二 有力藩の情勢と廃藩置県 35

31

三 大久保利通政権と西南戦争 39

四 憲法制定と議会開設への道 42

対話編

46

幕藩体制の動揺 46 新政府軍の北上——箱館戦争 49 近代国家をめざして 53 木戸

孝允、西郷隆盛、岩倉具視 54 大久保利通(二)——思想 58 大久保利通(二)——外

交と内政 60

第3章

日清戦争と立憲政友会の成立

63

一 大日本帝国憲法の運用 63

二 初期議會 67

三 条約改正と日清戦争 70

四 隈板内閣の挫折と立憲政友会の成立 72

対話編

77

初期議會の特徴 77 初期議會の実際 79 樺山資紀の蛮勇演説 81 条約改正問題 82

日清戦争の始まり 84 明治天皇の戦争指導——首都の移動 85 下関条約の締結 87

戦後経営——政党との提携の模索 89 立憲政友会の成立 91

第4章

日露戦争と大正政変

95

一 桂太郎内閣の成立 95

二 日英同盟の締結と日露戦争 97



三 桂園時代 100

四 大正政変と立憲同志会の成立 105

対話編 108

日英同盟の成立 109 緊迫する日露関係——日露戦争 110 ポーツマス条約の締結と国内の

反発 112 日露戦争後の社会の変化 115 日露戦争後の対外政策 118 桂園時代をどう見

るか(一)——桂太郎という政治家 120 桂園時代をどう見るか(二)——陸軍と議会 121

桂園時代の終わりと新党運動 123 激動の時代——戦争と政党 126

第5章 第一次世界大戦と政党政治 129

一 政党総裁の政治指導 129

二 第二次大隈重信内閣と第一次世界大戦 131

三 原敬内閣と原没後の政友会の分裂 133

四 政友会と民政党 137

対話編 142

第一次世界大戦期の内政と外交 142 原敬と日記 146 関東大震災の衝撃 147 昭和期の

政党政治——政党の系譜と選挙結果 152 二大政党の時代をどう見るか 155 元老制度と西

園寺公望——憲法外存在 157 政党の役割の重要性 159

第6章 十五年戦争の時代 163

一 昭和の動乱 163

二 満州事変と陸軍 165

三 国策統合機関と日中戦争の勃発 169

四 近衛文磨・東条英機と太平洋戦争 171

対話編 177

満州事変と五・一五事件 177 五・一五事件後の首相選定プロセス——原田熊雄の日記から読

み解く 180 斎藤実と岡田啓介 183 二・二六事件 186 日中戦争の勃発と拡大 187

太平洋戦争 189 明治憲法体制の限界 192

第7章 占領と復興 197

一 占領下の外交指導 197

二 占領軍と民主化 200

三 経済復興と政権交代 203

四 吉田茂と講和独立 206

五 吉田内閣の崩壊 209

対話編 212

敗戦と占領 212 占領期の日本政治の論点 214 吉田茂と戦後復興 218

コ講和条約の締結 220 サンフランシスコ

第8章 日米安全保障条約の改定 225

一 鳩山一郎という「ブーム」 225

二 社会党統一・保守合同による「一九五五年の体制」 227

三 岸信介内閣の成立 229

四 日米安全保障条約の改定 231

対話編

五五年体制の成立過程 236 保守合同の意義 239

岸信介という人物 243 岸信介に関する記録 247

新安保条約の調印と岸の退陣 248

241

第9章 高度経済成長の政治

一 高度経済成長 251

二 国民所得倍増計画と自民党の制度化 254

三 「低姿勢」の国会と外交 257

四 「オールターネーティブ」のゆくえ 260

対話編

池田勇人内閣の成立 262

の人脈 266 派閥の成立——池田派（宏池会）誕生 269

273 水資源開発——池田内閣期の政官関係 274 池田内閣期の外交 280

285 出か、時代の流れか——池田内閣の特色を考える 280

大蔵官僚と五高同窓 272 都市開

第10章 佐藤栄作内閣と沖繩返還

一 自民党政権の確立 285

285

二 佐藤栄作内閣の成立 287

三 「自治」の反乱と異議申し立て 289

四 沖繩返還と佐藤内閣の終焉 294

対話編 298

佐藤内閣の成立 298 佐藤内閣の政治運営——『佐藤栄作日記』を中心に 300 社会の変化

とメディアの役割 304 革新首長の登場と自民党の反省 304 社会反乱の時代 307 沖繩

返還と日米関係 309 沖繩から見た沖繩返還 312 ニクソン・ショック 313 佐藤の退陣

314

## 第11章 列島改造と保革伯仲の時代

一 派閥政治と自民党改革 317

二 田中角栄と三木武夫 319

三 福田赳夫内閣 323

四 長老政治から行政改革へ 326

対話編 329

「三角大福」の時代 329 列島改造と田中角栄内閣 331 石油危機 333 田中内閣の外交

335 田中政治の特徴と派閥の制度化 337 三木武夫内閣とロッキード事件 339 吉国一郎

のオーラル・ヒストリーを読む 340 派閥の提携と対立 343 福田内閣と大平内閣の違い

344 大平正芳の死と自民党の大勝 346

## 第12章 地方の時代と東京一極集中

349

## 第13章

### 政治改革と細川護熙内閣

#### 一 政治改革の時代

383

#### 二 竹下登内閣と自民党政治改革大綱

385

#### 三 細川護熙内閣の成立と崩壊

391

#### 対話編

396

リクルート事件から政治改革へ

396

竹下登のリーダーシップ

399

と自民党の大敗

401

石原信雄オーラル・ヒストリーを読む

402

リクルート事件の発覚

404

政治改革の時代へ

406

遅れてきた政治家・宮沢喜一

407

非自民連立内閣の誕生——細川

護熙内閣の内実

408

政治におけるテレビの役割

411

#### 一 党改革・行政改革から政治改革へ

349

#### 二 大平正芳内閣の「政策研究会」

351

#### 三 鈴木善幸内閣と第二次臨時行政調査会

353

#### 四 中曽根康弘内閣

357

#### 対話編

362

高度経済成長の終焉と新しい政策の模索

362

「地方の時代」

365

滋賀県の例——武村正義

知事時代

366

東京都の例——鈴木俊一知事時代

368

鈴木善幸内閣から中曽根康弘内閣へ

中曽根政治の特徴——大統領的首相

372

後藤田正晴オーラル・ヒストリーを読む

375

オーラル・ヒストリーの可能性

380

383

第14章

小泉純一郎内閣と自民党政権の崩壊

415

一 自社さ連立政権から自公連立政権へ 415

二 自民党の政権復帰 417

三 小泉純一郎内閣の政治指導 421

四 自民党長期政権の崩壊 424

対話編

427

自民党の政権復帰と竹下登

427

村山富市内閣の成立

429

さきがけが果たした役割

431

橋本龍太郎内閣の発足

433

小淵恵三から森喜朗へ

435

小泉純一郎内閣の成立

436

小

泉政治の特色

438

制度的背景と小泉の個性

440

自民党政権の崩壊

443

テレポリテイ

クスの限界とインターネットの普及

444

第15章

第一の政権交代と民主党政権

447

一 二〇〇九年の「政権交代」 447

二 鳩山由紀夫内閣の「大臣政治」と菅直人内閣の微修正

450

三 東日本大震災と財政危機 453

四 新しい時代の政治指導 458

対話編

461

民主党の変容と政権交代

461

なぜ民主党政権は失敗したのか

464

民主党政権の意義と教

訓

465

東日本大震災の発生と復興構想会議

466

いまだ「災害」は始まらず？

469

二

〇一二年の政権交代

472

同時代史と政治史

473

# 第16章 第二の政権交代と第二の安倍晋三政権

一 再登場する安倍晋三 477

二 集団的自衛権の憲法解釈の変更と安保法制の制定 480

三 憲法改正・首相スキャンダル・天皇退位 484

四 グローバル・パンデミックと長期政権の終焉 488

## 対話編

492

憲政史上、最長の政権 492 長期政権となった理由 494 平成政治改革のラストランナーか

497 保守勢力との距離感 498 野党の役割とは 500 官邸への権力集中 501 国会論戦

の形骸化 502 天皇退位の問題 505 新型コロナウイルスと日本政治 507

読書案内 511

歴代首相年表 535

人名索引

事項索引

550 542

\* 年代、月日については、基本的に西暦で統一した。

\* 史料の引用については、原則として、送り仮名はそのままとし、旧字体は新字体に改めた。

\* 本文中の図表は、各図表の下に出典を明記したものの以外は、すべて筆者が作成したものである。

## 第4章 日露戦争と大正政変

### 目標&ポイント

日露戦争により、朝鮮半島への影響力を確保した日本は、藩閥政治家の桂太郎と政友会との安定した政権授受の時代を迎える。これが、大正政変によって崩れる過程を追跡する。

### キーワード

桂園時代 西園寺公望 原敬 立憲同志会

### 一 桂太郎内閣の成立

一九〇一年五月、第四次伊藤博文内閣の総辞職後、元老会議が開催され、井上馨に組閣命令が下ったが、蔵相・陸相人事が不調に終わり、井上は組閣をあきらめた。伊藤への情報提供者であった伊東巳代治いとう ぢよじは、政権維持に熱意を燃やす政友会を配下にしたがえた伊藤が再度組閣する意欲を持っていると観察しながらも、いよいよ首相は、憲法制定時の閣僚から「第二流」の次世代へと移行するときに来たと見ていた。年齢・経験から最有力候補であった元陸相の桂太郎は、山県有朋邸で元老会議の結果を聞く前に伊東のもと



に立ち寄った。伊東は桂にこう語った（国立国会図書館憲政資料室所蔵『翠雨莊日記』、一九〇一年五月二十三日条）。

元老等が今日に至るまで国家を玩弄して其責を第二流に譲らんとするも、決して其手に乗せらるゝ如き愚を為さずして、遠からず氣運の来るを待ち、決して今回の勧誘に応ずべからず。老兄万一にも元老に逼迫せられ余儀なく引受くることあるも余は断じて其列に加ることを欲せず。実に今日は元老と少壮との関ヶ原なれば努めて鋭鋒を露出することを避け、飽まで元老等を尊重して元老等の間に善後の手段を盡さしめ結局其無能を天下に表白するに至り、人心悉く元老に去りて第二流の奮起を促すの輿論天下に喧伝するに至り始めて考慮を費すべし。

桂は伊藤の再起を促し、伊藤と懇談するが、桂の政權担当欲を察知した伊藤は、天皇に拝謁したとき、桂を推薦した。こうして「善後の手段」がつきた元老は、「第二流」の世代へ首相を譲ることとなる。桂は、蔵相に曾禰荒助（そねあらすけ）、司法相に清浦奎吾（きよらけいご）、農商相に平田東助など主要大臣を山県系官僚で固めた内閣を発足させた。

長州出身の陸軍軍人で、維新後早くにプロイセンに留学して軍事制度の研究を進め、帰国後は軍制面での要職を歴任して第一議会時には陸軍次官として政府委員を務めて議会対策の前面に立ち、第三次伊藤内閣以降陸相に就任し、第二次山県内閣では山県の右腕として憲政党との交渉を引き受けた桂は、軍事作戦の指揮者というよりは軍政の指導者であった。雑誌『太陽』の記者であった鳥谷部春汀（とやべしゆんてい）は組閣直後にこう桂を評した（鳥谷部春汀『明治人物小観』博文館、一九〇二年、二二八―二二九頁）。

子（桂子爵を指す——引用者注）は武骨一片の軍人にあらずして、政治家たるの才能あり。而も其の八面玲瓏、円転融通の資質頗る伊藤侯に類する所あるを以て、侯は其の人物を愛して多少の優遇を寄与した

るは即ち之れあらむ。子も亦侯を長州出身の先輩として、伎倆ある政治家として常に敬重の意を失はざらむことを勉むるは即ち之れあらむ。されど其の政治的關係は、山県侯に深厚なるだけ伊藤侯には冷淡なる可く、随つて子の内閣組織に同情を表するものは伊藤侯にあらずして山県侯なり。

野党となつた政友会は、伊藤総裁の指示が代議士に及ばず、尾崎行雄、松田正久、原敬ら幹部は政府と対決する方針であつたが、予算審議にあつて妥協派が桂に切り崩され、党として政府との妥協を余儀なくされた。一九〇二年の任期満了の衆議院総選挙で、政友会が過半数議席を維持すると、桂は地租増徴を掲げてこれと対立し、さらに十二月に衆議院を解散したものの、翌年三月の総選挙でも議席はほとんど変化がなかつた。桂は伊藤に譲歩するが、政友会内部では尾崎ら伊藤を見限つた議員が次々と脱党していく。伊藤は政党組織をあきらめざるをえず、山県・桂の構想に従い、枢密院議長に転出した。代わつて政友会総裁に就任したのは、西園寺公望であつた。憲政本党は大隈が総理を務めていたが、議席数は政友会に劣り、大隈には元老からの支持もなく、首相に奏薦される可能性はきわめて低かつた。藩閥は伊藤・山県・井上と協調しうる桂が代表し、議会は松田・原に支えられた西園寺の政友会がおさえる体制が安定的に継続していったのである。

## 二 日英同盟の締結と日露戦争

大陸では、第二次山県内閣時代の一九〇〇年に排外運動の義和団事件が広がり、これを背景に清は列強に宣戦布告した。イギリス、アメリカ、ロシア、ドイツなどと並んで日本も出兵して乱を鎮圧し、清と北京議定書を結んだ。しかし、影響力の維持を図るロシアは、満州での軍の駐留を継続し、日本に強い脅威

を与えた。すでに日清戦争後の三国干渉により日本が返還した旅順を、ロシアは租借しており、陸海軍を満州地域に展開させていたために、その脅威はより深刻と受け止められた。

これに対して桂内閣は、第四次伊藤内閣の下で準備交渉が開始されていた日英同盟の交渉を継続するとともに、イギリスの態度が曖昧であつたために、一九〇一年九月に伊藤をロシアに派遣し、日露協商の締結も同時に進めることを決断した。だが、十一月にイギリスが日英同盟草案を手交したために、交渉は急速に進展し、十二月の元老会議は同盟案を承認し、〇二年一月に同盟協約は発効した。締約国の一方が他の一国と交戦する場合に、他方の締約国は中立を維持し、二国以上と交戦する場合は参戦するという内容であつた。

他方で、日露関係は、一九〇二年四月にロシアが満州からの撤兵を清との間で了解すること一度は緊張緩和に至る。だが、ロシアは十月に第一次撤兵を終えたものの、〇三年四月に予定していた撤兵を行わず、日露関係は再度緊迫化した。四月二十一日、京都の山県の別邸無鄰菴むりんあんで、山県、伊藤、桂、小村寿太郎外相の四人で今後の日露交渉に關して、朝鮮についてはロシアに譲歩せずに「日本の優越権」を主張し、ロシアの満州への「優越権」もそれと同等程度までは認めるという方針を確定した。そして六月に、伊藤、山県、大山巖、松方、井上の元老五名と、桂首相、外相、陸相、海相で御前会議が開催され、対露交渉方針を確定させたのちに、桂は内閣総辞職を決め、参内のうえ、天皇に辞表を奏呈した。山県が伊藤が首相となり、交渉に当たるべきといふのである。とりわけ問題は元老と党総裁を兼ねた伊藤にあつた（宮内庁『明治天皇紀』第十、吉川弘文館、一九七四年、四六三〜四六四頁、一九〇三年七月一日条）。

若し夫れ日露交渉の事始まるに及びて、政友会が猶従前の態度を持って改むることなくば、其の一致党

の態度は敢へて意とするに足らざるも、総裁侯爵伊藤博文の、時に元老として、時に党首として、或は政府を援くるものの如く、或は然らざるものの如く、常に政界を牽制すべきを以て、到底万全に対露交渉の進行を図る能はざるのみならず、一たび之れが実行に入らば、即ち戦争は避くべからざるものと予測せざるべからず、事茲に臨みて、蕭蕭相聞ぐ如きは、啻に一国の体面を傷つくるのみならず、延いて国家の安危に関するや大なり。

天皇は桂の辞職を認めず、伊藤に枢密院議長となるよう内旨を与えた。伊藤は、元老が皆、枢密院に入ることゝ条件に受諾した。桂は、こうして元老の支持を固めたうえで、対露交渉に臨んだ。在野では、八月に対露同志会が結成され、ロシアを満州から駆逐すべきとする強硬論が唱えられていた。交渉では、ロシアは満州問題を議題とせず、韓国問題のみ交渉の対象とする姿勢を崩さないままであった。一九〇四年二月に日本は宣戦布告し、日露戦争が開戦したのである。

戦争は、仁川に上陸した陸軍が鴨緑江を越えて満州に進軍し、遼陽、沙河で勝利し、苦戦していた旅順も陥落させて、奉天会戦で勝利を収めたのち、膠着状態となった。海軍は、黄海海戦で勝利し、旅順陥落によって太平洋艦隊を壊滅させ、バルチック艦隊も日本海海戦で撃破した。日本はアメリカのセオドア・ローズヴェルト大統領に講和の仲介を依頼し、その勧告をロシア皇帝も受諾して、一九〇五年八月にポーツマスで講和会議が開催された。日本は年来の宿願であった韓国への指導権をロシアに認めさせ、旅順・大連の租借権を得、長春以南の鉄道の譲渡を受けた。また、南樺太を譲渡させて、かろうじて領土も割譲させることができた。戦死者数八万四〇〇〇人、臨時戦費一八億円は、日清戦争の戦死者数一万三〇〇〇人、臨時戦費二億円と比べて桁違いであり、日本が総力をあげた戦争となったのである。

しかし、賠償金を得られないことで、国内世論は沸騰し、日比谷公園で行われた抗議集会は群衆が暴徒

化した騒乱となった。以後も、東京市の電車賃値上げ反対・電車会社合併反対運動、営業税反対運動など都市騒擾が相次いだ。第三次桂内閣を倒した護憲（憲政擁護）運動も、こうした都市民の抗議行動の延長にあったのである。

### 三 桂園時代

桂首相は、戦争中から原に対して辞任後の後任を西園寺とする意向を伝えていたが、ポーツマス会議から小村外相が帰国した後、桂は原に対して、一九〇五年十二月に議會を召集したのち、首相を辞任し、後任に政友会総裁の西園寺を奏薦する意向を伝えた（原奎一郎編『原敬日記』第二巻、福村出版、一九六五年、一五二頁、一九〇五年十月六日条）。桂は、〇六年度予算の骨格を固めた後に辞任した。そして西園寺に大命が降下し、司法相に松田、内相に原という政友会幹部に支えられた内閣を発足させたのである。

西園寺公望は、一八四九年、権中納言徳大寺公純の次男として生まれ、西園寺家に養子に迎えられた。徳大寺家も西園寺家も撰家に次ぐ清華家に属する名門の家柄であったが、幕末の動乱の中で血気にはやる西園寺は、公家の伝統に飽きたらず、岩倉具視に認められて、戊辰戦争では山陰・北陸・会津での戦闘に従軍した。戦後まもなくフランスに留学し、パリ大学法学部でフランス法を学び、十年滞在したのちに帰国した。その後、伊藤の憲法調査のための訪欧に同行し、オーストリア公使、ドイツ公使を務め、帰国後は、貴族院議員となるかたわら、民法などの法典整備に尽力し、外相・文相を経て、政友会の結成に参画した。岩倉や貴族院議長を務めた近衛篤磨の次世代の華族出身政治家として期待され、国際経験豊かな自由主義者であった。だが、政治的野心については、桂や原と比べると、ほとんどなきが如くであった。原

は日記の中で、自分の具申に従わない西園寺をしばし罵倒する。たとえば第一次内閣の総辞職を西園寺が原に通告したとき、原は西園寺を「意思案外強固ならず、且つ注意粗にして往々誤あり」と評した（同右、三〇九頁、一九〇八年六月二十七日条）。西園寺自身は、第二次内閣を総辞職したときを振り返り、「強いてやればわたしもまだやれないことはなかつたろうが、何かやるには多少の余裕を残す方がよいというのが、わたしの平生の考え方だから、固執はしなかつた」と述べている（木村毅編『西園寺公望自傳』講談社、一九四九年、一四六頁）。西園寺は、原を「吾々が書画をたのしむように、金に接するのがすきであつた」と評し、続けて党の会計については「鉛筆で丹念に出納を書いて出す」と述べ（同右、一七〇頁、原が政治資金を集め、使うという職業政治家としての役割に自覚的であつたことを見抜いていた。しかし、西園寺はと言えば、古書収集、篆刻、てんこく詩作、盆栽、いづれも趣味に興じたものの、「半上落下で何事にも徹底しない」と回顧する（同右、二〇七頁）。西園寺は、政治であれ趣味であれ、何かに徹底すること自体を忌避していた。それが彼にとつての自由であつた。孫の西園寺公一は、晩年の公望について「物事をあくまでも冷静に考える合理主義者であつた。若いころからの、火のように激しい、厳しい性格を内面に包蔵はしているのだが、感情に動かされて、それが外面に現われることは滅多にない。ただ、自分の合理主義と背反するものと直面した場合にのみ、時として、その激しさと、厳しさが、思いもかけない爆発力を現わすことがある……（中略）……偏狭な老人ではない。およそ偏狭なものは嫌いなのだ」と観察した（西園寺公一『貴族の退場』ちくま学芸文庫、一九九五年、一六二―一六三頁）。「偏狭」に「余裕」はない。政権の維持に決定的な局面で、権力への執着に「偏狭」さを嗅ぎつける西園寺は、藩閥の自己防衛からも、政党の勢力拡張からも逃れようとして、ちやうちや躊躇なく辞職を選ぶ。

第一次西園寺内閣は、桂内閣の財務次官であつた阪谷芳郎を蔵相として、桂内閣の方針を引き継いだ。

すでに帝国議会在開会中であつたため、一九〇六年度予算は前内閣下で作成された予算案をほぼ継承し、鉄道国有化法案を可決させ、日露戦後経営の柱である南満州鉄道株式会社（満鉄）を発足させた。

だが、原内相は、従来の内務行政の改革に意欲的であり、次官、警視總監、地方局長に、のちに政友会系となる官僚を抜擢し、警視庁改革によつて警視庁内の人事を刷新し、さらに知事・事務官の一部に休職を命ずるなど大規模な異動を行った。また、町村と府県の間に位置していた郡制の廃止を進めようとした。いづれも内務省を掌握していた山県系官僚への攻勢であつた。郡制廃止法案は衆議院を通過したものの、貴族院で山県系官僚が反対に回り否決されたが、原は「全く縁故なかりし貴族院が斯くまで動き且つ政友会の如き大政党的感情を害するは憲政の爲めに不可なりとの議論を生じたる位」であると観察し（前掲『原敬日記』第二卷、二二三頁、一九〇七年三月二十一日条）、さらなる貴族院の操縦の強化を内心に期したのである。

一九〇七年に内閣は大陸政策の基本方針を次々と定めた。四月に元帥府が帝国国防方針を決定して内閣もこれを受け入れた。それは陸軍はロシア、海軍はアメリカを仮想敵国とし、陸軍は平時の二五師団への拡張を、海軍は戦艦・巡洋戦艦ともに八隻を建艦することを内容としていた。七月に第三次日韓協約を締結し、従来日本が掌握していた韓国の外交方針についての指導権に加えて、内政についても実権を獲得した。八月には韓国の軍隊を解散させ、〇八年一月には日本人官吏を各省の次官級職に任命した。また〇七年七月には、第一次日露協約を締結し、満州に分界線を設定して勢力範囲を相互に承認し、日本の韓国併合に対しロシアは妨害・干渉せず、外蒙古へのロシアの特殊利益について日本は承認することが規定された。

だが、一九〇八年度予算をめぐる、元老と内閣は激しく衝突した。経済が停滞する中で歳出に見合う

歳入を確保できない可能性が生じ、井上を中心とする元老は財政健全化のために増税案の策定を求めた。○八年五月の衆議院議員の任期満了による総選挙を控えて、西園寺はこれに難色を示した。さらに逓相から鉄道予算への増額要求が出されたことで閣内が不統一となり、内閣はいったん総辞職した。天皇は、蔵相・逓相の辞任のみ認め、内閣は元老の財政方針に従うことで再度、予算編成を行うこととなった。しかし、元老と桂は、西園寺内閣への不信を強めて西園寺に辞任を求めた。五月の総選挙で政友会は過半数議席を獲得したが、六月には西園寺は辞意を松田と原に伝えた。大命は桂に降下したのである。

第二次桂内閣は、蔵相を桂自身が兼任し、内相にかつて産業組合の制度設計に尽力して農村振興に関心の深かった平田東助を据え、逓相に満鉄総裁であった後藤新平を抜擢して、財政再建と地方改良・鉄道政策に力を入れた。地方改良としては、町村の財政基盤を強化するために、町村合併を進め、産業組合・農会などを設立することで貯蓄励行が図られた。そのための道徳的基礎として組閣直後の十月に戊申詔書が<sup>かえぼ</sup>渙発された。鉄道政策では、逓信省から鉄道関係部局を分離して鉄道院を設置して後藤を総裁とした。そこでめざされたのは、国有化されたばかりの組織の統合であり、さらに幹線網を充実させるための鉄道広軌化であった。

ただし、内政の基盤は財政にある。桂はすでに第一次内閣時代から政党との予算交渉会を設けて、その要求をあらかじめ取り入れることで円滑な予算審議をめざしていたが、第二次内閣では自ら蔵相となり、憲政の基軸を「国家財政統合」に求めた（伏見岳人『近代日本の予算政治一九〇〇—一九一四年——桂太郎の政治指導と政党内閣の確立過程』東京大学出版会、二〇一三年）。組閣後の一九〇九年度予算の編成に際して、桂は政友会のみならず諸政党との予算交渉会を開いた。「一視同仁」を標榜して特定政党と与党とはしないが、憲政本党を中心に非政友会系政党の合同を期待したのである。だが、憲政本党が内紛で混乱するのを見て、



桂は政友会との提携に舵を切った。そして、翌一〇年度予算では、桂との提携を強めた政友会は、各党とは別に独自で鉄道敷設要求を政府に提議するようになった。予算成立後に非政友会系政党は合同して立憲国民党（国民党）を組織したが、桂は政友会との提携を変更しなかった。

一九一〇年に桂内閣は韓国併合を仕上げるが、内政では幸徳秋水ら社会主義者、無政府主義者が天皇暗殺を企てたとする大逆事件の処理に追われた。また、桂内閣は一一年度予算の編成に際して鉄道広軌化を掲げたが、狭軌のままより広範囲に鉄道敷設を要求した政友会内の意向に配慮して、これを取り下げた。この過程で、桂は、政友会と本格的に提携し、一一年には政権を西園寺に委譲する意向を政友会に伝え、同年一月に政友会所属両院議員、各大臣・次官の出席する午餐会を開催して、政友会との提携を誓ったのである。八月に桂は西園寺を推して辞職した。天皇は、元老に諮問せずに西園寺に組閣を命じたのである。第二次西園寺内閣は、内相に原、司法相に松田という人事の骨格は崩さなかったが、蔵相には勸業銀行の山本達雄を据え、桂と近い大蔵官僚の影響力を弱めようとした。桂内閣時代に毎年継続した予算交渉会を通じて、政友会内部で予算要求を絞り込む手続きが徐々に確立し始めていた。この党内手続きを統制した原内相に対して、山本は大蔵官僚に接近して強い緊縮方針を主張するようになる。両者の対立に軍の予算要求が加わることで、内閣は次第に苦況に立っていた。

一九一一年十月に武昌蜂起を端緒として中国全土に革命運動が広がり、翌一二年二月に清の皇帝が退位した。この辛亥革命の過程で、日本はロシアとの間で満州・内蒙古の分界線画定交渉に臨んだ。同年七月に第三次日露協約が調印され、日本はロシアとの安定的な関係を構築することに成功したのである。だが、四月に病没した石本新六に代わって上原勇作が陸相に就任すると、上原は、中国情勢をにらみながら、帝国防方針以降の陸軍の課題であった二個師団増設を強硬に主張した。七月には明治天皇が死去し、大正

へと改元された。ここで山県らの意向で、桂は新天皇を補佐する内大臣に就任し、宮中府中の別を明確にする慣行から、政界と距離を置かざるをえなくなつた。調停者のないまま、上原陸相の強硬な主張を押さえるために西園寺首相は山県に財政状況を説明したが、山県は上原の説得を拒否した。内閣が増師を見送る決断をすると、上原は天皇に直接辞表を提出した。後任を陸軍が推薦せず、内閣は総辞職したのである。

#### 四 大正政変と立憲同志会の成立

第一次桂内閣以降は、桂と西園寺の間での政権の授受は円滑であり、後任首相は十分に財政・外交方針を打ち合わせつつ新しく政権を担当した。しかし、一九一二年十二月の第二次西園寺内閣の突然の瓦解は、後任首相の選定をきわめて困難にした。元老会議は、松方、山本権兵衛を推挙したが、いずれも固辞し、異例であつたが最後に内大臣の桂を推薦した。国家財政統合者としての自負心の強い桂自身は、増師問題と海軍予算について国防会議を設置して対応する方向で半ば調整を終えて組閣し、西園寺内閣が解決できなかった問題を処理しうる展望を抱いていた。

だが、西園寺内閣末期に増師反対、憲政擁護を標語とする護憲運動が政友会をはじめとする各党と在野で急速に広がっており、長州閥で陸軍出身の桂の登場は、それ自体が強い非難を浴びることとなつた。他方で、桂は、新時代の内閣には政友会に代わる新政党の組織が不可欠という構想を次第に温めつつあつた。明治天皇の死を桂は訪欧中に聞き、急遽帰国することとなつたが、この訪欧も、現地の政党政治を見学することが大きな目的であつた。一九一三年一月に桂の新党構想が発表されると、第二党の国民党は分裂したが、政友会は原を中心に結束を強めた。新党に対する新聞の論調も冷淡であり、政友会と国民党は結束

を強めた。議会は紛糾し、内閣は停会を繰り返さざるをえなくなった。

ここへ桂が用いたのは、詔勅であった。桂は組閣前に、内大臣から首相に転出する際に、新天皇の勅語を得る形をとり、海軍予算増の先送りに抗議する齋藤実海相の留任のために優詔を出すよう働きかけていた。そして、議会が紛糾したときに、桂は政友会総裁の西園寺に事態を收拾するよう命ずる詔勅を出すよう取りはからった。イギリス政治から着想した加藤高明外相の献策によるものであったが、事態は極度に悪化した。政友会は憤慨し、すでに議事堂を取り囲んでいた群衆は激高し、警官隊との衝突が起り始めた。もはや桂には総辞職以外に残された手段がなかったのである。

桂後は政友会と提携した山本権兵衛内閣が成立した。病気が悪化しつつあった桂は、新党樹立に生命の炎を燃やした。第三次内閣の書記官長であった江木翼は総辞職の後、「公ノ命ニヨリ立憲同志会ノ事二当ルコトト為ル」(『江木翼日記』、一九一三年九月二十六日条、東京大学社会科学研究所蔵『江木翼関係文書』所収)と日記に記した。桂は、新党に加藤を入党させ、大隈と接近し、国民党脱党派と桂系官僚とで立憲同志会の結党をめざした。病状が悪化した桂は、江木によれば「政治談ヲ為サルハ唯一ノ楽ト見ユ」であったという(同右、一九一三年九月二十六日条)。死の直前に桂から面会したいという要望が再三なされたにもかかわらず、原は、桂が策略をしかけている可能性を考慮し、ぎりぎりまで面会を避け続けた。「自分の心中を知る者は独り原のみなり」と桂が言ったという真偽の定かではない話を聞かされた原は「余の知れる桂と、桂が知れりと思ふ桂とは如何なるものなりしや不明なり」と記した(原奎一郎編『原敬日記』第三巻、福村出版、一九六五年、三四四頁、一九一三年十月七日条)。笑顔で自己韜晦を繰り返し、気難しい元老と政党との間を調停し続けた桂の振る舞いを、原はあらためて反芻したのであろう。桂は十月に病没し、新党・立憲同志会は十二月に創立大会を開催し、加藤高明を総理に推戴した。しかしながら、江木は桂の死を予

感して次のように観察していた——「政党ヲ大成スルニハ大度量広ク大小合セ飲ミ清濁併セ食フノ快ナカ  
ルベカラズシテ而シテ吾党ニ之ニ当ルモノ無キハ嘆ズベキ也」。いうまでもなく「大度量」とは桂を指し  
ている。桂死後に桂なし、それが結党時の立憲同志会であった（前掲『江木翼日記』一九一三年九月二十八日  
条）。

▼参考文献

- 生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫、二〇〇五年。  
千葉功『桂太郎——外に帝国主義、内に立憲主義』中公新書、二〇一二年。  
坂野潤治『明治国家の終焉——一九〇〇年体制の崩壊』ちくま学芸文庫、二〇一〇年。  
升味準之輔『日本政党史論〔新装版〕』三、東京大学出版会、二〇一一年。  
升味準之輔『日本政党史論〔新装版〕』四、東京大学出版会、二〇一一年。  
御厨貴編『時代の先覚者 後藤新平 1857-1929』藤原書店、二〇〇四年。  
三谷太一郎『増補版 日本政党政治の形成——原敬の政治指導の展開』東京大学出版会、一九九五年。

## 対話編

牧原 今回は、日露戦争と大正政変について考えてみたいと思います。

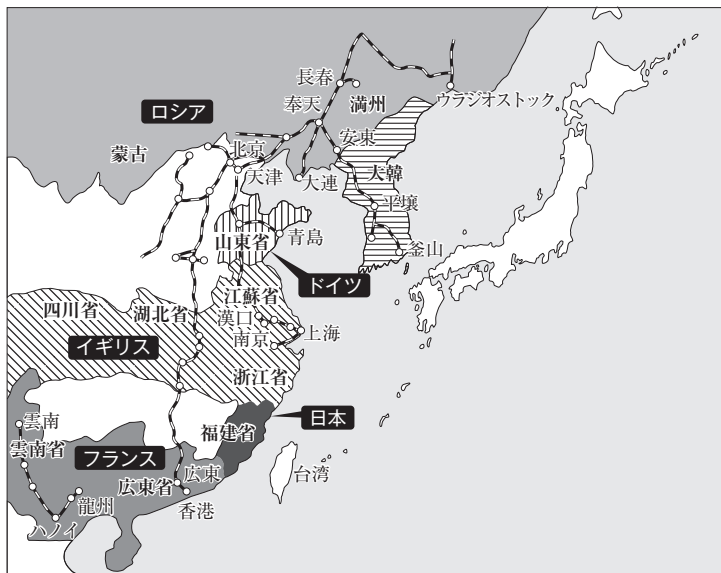
御厨 二〇世紀というのは、日英同盟と日露戦争で始まるという、そういう安全保障の問題を少し考えてみたいと思います。

牧原 一九〇一年六月、陸軍軍人で陸軍大臣を務めていた桂太郎が内閣を組織します。桂は長州出身ですが、明治憲法体制を作り上げた伊藤博文、山県有朋、井上馨たちからは一代若い政治家です。ここに、明治国家は指導者の世代交代を迎えました。桂の前には、政友会を基盤にした伊藤博文が第四次の内閣を組織していましたが、予算編成をめぐる閣内不一致で総辞職しました。伊藤は引き続き首相を務める用意がありました。山県は伊藤の首相再任に難色を示し、井上は一度は内閣を組織しようとしたが断念し、元老の中で引き受け手がない中から登場したのが桂でした。

その後、伊藤は山県らの動きもあり、野党としての政友会総裁を辞任して、枢密院議長となりました。こうして山県、伊藤、井上らは政治の一線から退きます。そして、この政友会総裁の後任には、公家出身でフランス留学経験が長く、ヨーロッパの政治と文化に親しんでいた西園寺公望が就任します。政友会は衆議院で最大議席を占めた第一党であり、合意なしには帝国議会での予算の通過は実質的にありません。

桂は西園寺率いる政友会と妥協しつつ政権を運営し、以後、またこれを西園寺に政権を譲り、桂と西園寺が交互に政権を担う桂園時代が到来しました。

図 4-1 日清戦争から日露戦争までの列強の中国進出



そして、この時期の国際情勢を見ていきたいと思えます（図4-1）。この地図のよう  
に、日清戦争後、中国大陸は帝国主義の  
列強に侵食されていきます。日本は桂首相  
のもとで、この中で日英同盟を締結し、朝  
鮮半島への影響力の確保をめぐるロシア  
と対立し、やがて日露戦争に入っていしま  
す。そこでまず、政治家桂太郎と日英同盟  
について考えていきたいと思います。

#### ◆ 日英同盟の成立

御厨 さて、今、日英同盟という話が出ま  
したが、実はこのとき選択肢は二つあった  
んです。日英同盟か日露協商かというこ  
とです。そして世代交代という話がありま  
したけれども、第二世代である桂太郎、そ  
して外務大臣である小村寿太郎は、このイ  
ギリスの潜在的なパワーに目をつけて、イ  
ギリスと同盟を結ぶことによってロシアを

牽制しようとするわけですね。ところが、これに対して元老の伊藤博文や井上馨、こういった人たちはロシアと交渉をして、ロシアとの平和的な協調の中で、東アジアの勢力範囲を確定したいと考えて、日露協商論を強く押し出していました。そういう中で最終的には、日英同盟を結ぶことになります。

その内容について、少し議論をしてみたいと思います。主に三つあります。第一に、清国または韓国において保護すべき財産が侵される、そういう場合には日英両国は特殊権益を保護するために必要な措置をとるといわけです。それから第二に、今度は日英両国のうちの一国がその利益を保護するために第三国と戦争をすると、他の一方は中立を守る。ところが第三に、戦争になったときに別の一国がそれに参戦をした場合には、もう一つの同盟国が参戦をするというわけです。ここに、日英がほぼ対等と言われる条約が締結されたのです。これは脱亜入欧を悲願としていた日本にとっては、これくらい素晴らしいことはいないというように思われたのです。当時のことを書き記した、生方敏郎は『明治大正見聞史』の中で、その喜びをこう語ってるんですね（前掲『明治大正見聞史』一二五頁）。

とにかく提灯に吊鐘、お月様とすっぽんの縁組が出来たようなもので、すっぽんに取っては嬉しいことに  
違くない。誰も皆涙をこぼすほど歓んだ。

二〇世紀になる早々、これから平和に満ち満ちてくるんじゃないかという気持ちを国民が持った。二〇世紀の夜明けは、日英同盟とともにあるというのが、このときの国民の大きな期待であったと言えると思います。

#### ◆緊迫する日露関係——日露戦争

牧原 この日英同盟の締結と並行して、日本とロシアとの関係は次第に緊迫していきます。その大きな原因が義和団事件、北清事変で、中国で対外排斥民主運動が起こるわけですね。これは日英同盟締結前の一八九九年に起こります。その後、ロシアが満州から撤兵しないという状況が続きます。この状況の中で、日本は今後の対露方針を検討するために、一九〇三年に京都にある山県有朋の別邸無鄰菴で伊藤、桂首相、小村外相、山県の四人が会議を開きます。

この無鄰菴の会議で四人は、ロシアは満州、日本は韓国の優越権を相互に認めるという日露交渉の方針について了解し、場合によっては開戦も辞さないという方向がほぼ固まります。その後、六月に御前会議が開かれて、これが確定されて、交渉が始まるということになるわけです。

さて、その日露交渉がまともでない中で極東ロシア軍が増強され、さらに韓国国内の政治が流動化します。日本政府は交渉を打ち切り、一九〇四年二月に対露戦に突入しました。ちょうど国内では、前年の十二月に対露交渉を早めるために、衆議院開院式で対露強硬派の河野広中議長が内閣弾劾の勅語奉答文を提出し、衆議院が解散となっています。その後、総選挙は開戦後の三月に行われます。こうして議会も戦争を支持するという挙国一致の体制が整ったわけです。

その後、戦況がどのようになったかを見ていきましょう(図4-12)。陸軍は朝鮮半島に上陸し宣戦布告となる。その後、陸軍は朝鮮半島から満州へと軍を進めて、鴨緑江を渡って朝鮮半島を確保する。他方、この遼東半島を制圧するために、南山、大連を占領し、ロシア太平洋艦隊の母港である旅順を攻撃しますが、ここは難攻不落で陥落しない。しかし軍は他方で内陸のほうにも軍を進めて、遼陽、沙河の会戦で勝利し、一九〇五年一月の旅順陥落後、今度は奉天の大会戦でかろうじて勝利し、その後、戦線は膠着(こうちやく)する。海軍はロシア太平洋艦隊に対して、黄海の海戦で勝利するものの、旅順港に逃げ込んだ艦隊を殲滅(せんめつ)で



図 4-2 日露戦争



さずにいましたが、先ほどの旅順の要塞陥落後、これも撃破します。ロシアは大西洋からバルチック艦隊を日本海まで回航させますが、これも五月の日本海海戦で壊滅的な打撃を受けてしまう。こうして戦争は膠着状態に陥りました。

#### ◆ポーツマス条約の締結と国内の反発

御厨 そんな中、今、話に出た日本海海戦における勝利がありました。これを機に、日本はアメリカ大統領のセオドア・ローズヴェルトに依頼をしまして、日本とロシアが和平交渉に臨むこととなります。一九〇五（明治三十八）年にアメリカのポーツマスで講和会議が行われましたが、これはかなり難航を極めました。どうしてかと言うと、おわかりのようにロシアはまだまだ兵隊を増強できる状況にあった。日本は戦線が伸び切ってますから、これ以上は苦しいのですが、もう一戦交えればロシアは勝つと思っていましたから、和平条件を徹底的に値切ろうとするわけです。

その結果、ポーツマス条約では、一体どうということが

決まったのか。問題なく決まったのは、日本が韓国に対して必要な指導の措置をとることをロシアが認める。それからロシアは遼東半島の租借権を日本に譲る。さらに、ロシアは長春・旅順間の鉄道の権益を日本に譲る。この三点は双方ともに認めていました。これが条約になるのですが、問題は、日本は領土の割譲、そして同時に賠償金を求めています。この二つは絶対とれるというように日本の国民も思っていた。しかし最終的には、南樺太の割譲だけにとどまったというところで、講和条約ができてみますと、日本の国内はこれだけしかとれないのかという驚きから一種の虚脱状態になるんです。どこへぶつけていいかわからない怒りが対外硬派や、いろいろな人たちから起こってくる。ポーツマス条約の調印の日に、すなわち九月五日に、東京では三万人にのぼる人々が日比谷公園に集結して、大会を開いて講和条約破棄、戦争続行を決議することになって、騒擾が始まる。これが日比谷焼き討ち事件と言われているものであります。

問題は、これにどう対処するかということで政府は戒厳令を敷こうといたします。一番問題になりましたのは、この戒厳令です。戒厳令を敷く場合には樞密院の批准が必要ですから、樞密院にこれをかけるわけですけれども、樞密院でも実は反対論が多かったですね。つまり、講和条約の内容に反対をして、現実に騒擾を起こした国民に対する同情論が非常にありました。特に樺山資紀は初期議会でを行った蛮勇演説で有名ですけれども（第3章参照）、その彼が実は次のように言ってるんですね（『帝国憲法第八条ニ依り東京府内一定ノ地域ニ戒厳令ノ全部又ハ一部ヲ適用スルノ件』『樞密院會議筆記』明治三十八年九月六日）。現在の状況をどう解決するのか、これがうまくいかなかったら「講和ノ成立スルニ至ルトキハ或ハ志士ノ暴行ヲ為スモノアルニ至ルヤモ知」れぬ。つまり「志士」と言っている。普通だったら、不逞の輩やからと言うけど、そうではない。樺山から見れば、彼らは志士なんだというくらい、国民の雰囲気ふていを樞密院が代弁をした。もちろん戒厳令は通りませけれども、こういう雰囲気であったことが重要であろうと思

います。

そのことはもう一つ、実は当時ジャーナリストでありました馬場恒吾は、ジャパントイムズという会社におりましたから、当然、国際政治の力学がわかっていて、ポーツマス条約やむなしと考えていました。国際政治の力学から言って、これを受け入れるのは当然であるという理屈はわかっていたのです。しかし、あにはからんや、日比谷焼き討ち事件で警官と民衆がぶつかり合っている局面にでありますと、民衆に味方したくなる、つぶての一つでも投げたくなるという気分になったということを言っています（馬場恒吾『百伝点描』中公文庫、一九八九年、四一頁）。このように、本来なら国際政治の現実を知っている人間にとっても、やはり日本人としてナショナリズムの高揚が、やむにやまれぬものだったかを示す一例だろうというように思います。

**牧原** この日比谷焼き討ち事件は九月だったんですね。このあと、十月に連合艦隊が凱旋し、十二月に満州軍総司令部が凱旋します。この全体の雰囲気、ジャーナリストの三宅雪嶺は『同時代史』という本で描写しています。では、その凱旋がどうだったかと言いますと、まず東郷平八郎大将が上陸すべしとして、これは連合艦隊の場合ですが、市民が国旗を振り、提灯を掲げ雲霞の如く集まる。特に上野公園で開催した東京市の祝賀会では、パレードはどうなったかというところ、「市中は花電車、イルミネーション、幔幕、金屏風等にて満都の裝飾が錯綜す」とあり（三宅雪嶺『同時代史』第三卷、岩波書店、一九五〇年、四五五頁）、新橋の凱旋門を通り、銀座通りから京橋、日本橋、万世橋の三凱旋門を通過し、上野の凱旋門に至る。こういうことだったようです。三宅はこれをまとめて、この年、「本年は焼打事件の如き事あり、不平不満の声に満ちながら、凱旋車の祝賀に忙しく、祭日の浮れ気分にて年が暮れたり」（同右、四五六頁）。なんとなく落ち着かない感じで、今の御厨先生の言われたナショナリズムというものが、凱旋への非常に強い

高揚といったかたちで現れていると言えるのではないかと思えます。

### ◆日露戦争後の社会の変化

牧原 こうして日露戦争が終わりますが、日露戦争後の社会は、明治時代の日本の対外自主独立という目的が達成されたということで、変化が起こってきます。特に、この頃の学生は、個人主義的傾向が強まったと言われています。若者、学生にちよつとスポットを当てて考えてみたいと思います。そもそも明治十年代、東京という街には車夫と書生が非常に多かつたと言われています。そもそも東京は、学生がたくさん集まる街でした。彼らは東京に出てきて、学問によって立身出世を図ろうとする。これが明治十年代の若者でした。

たとえば一八八五（明治十八）年に刊行された坪内逍遙の『当世書生気質』には、いろいろな青年が出てきます。そういう若者の中で政治家志望でやや荒っぽい書生の例として、暑い夏の日にはげんこつでスイカを割って食べるという書生が出てきます。この書生がスイカを割った後になんて言うかというところ、こうあります（坪内逍遙『当世書生気質』岩波文庫、二〇〇六年、一二八～一二九頁）。

学者や理学者で、一生を終らうといふ料簡りょうけんの奴は、暫く論外としちよいて、まづ我輩らとおなじやうに、この活社会に運動して、大に政治おおいの改良でもおこなはうといふ志むねをりながら、無暗むやみに学問に勉強して、身体からだを不健康にしてしまふたり、あるひは婦女子なんぞと交際をして、ますます文弱ぶんじやくの風ふうを養ふたア、正ただに慨歎がいたんに堪へざる次第しだいぢや。……〔中略〕……

いはゆるマイト・イズ・ライト（マイト・イズ・ライトとは腕力は権利也といふ意）ぢや。万国公法ばんこくこうぽうがあらうが何があらうが、まだまだ道理ばかりでは勝つことがきんワイ。国と国との間の事は元来もとより論ずるま

でもないが、一個人の場合ぢやからって矢張腕力が勝を得るぞ。

政党人になつても、反対党から襲われたときは腕力で戦うのだと。こう言つて、剣道の腕を磨くことを周囲にすすめるのです。

こういふふうには、政治を改良したい、立身出世をしたい、腕力にものを言わせたい、といった雰囲気は明治十年代の書生の特徴でした。明治二十年代に入ると、全国に東京の第一高等学校（二高）をはじめとする旧制高等学校が整備される。帝国大学も同時に整備されていきます。特に旧制高校は寄宿舎生活を基本とし、ここでバンカラと立身出世主義を日露戦争まで濃厚に引き継ぎます。

ところが、日露戦争後、状況は変わってきます。一九二九年に東京帝国大学法学部の教授で商法・法哲学を専攻し、この時期から新聞雑誌の論壇に社会批評を寄稿していた田中耕太郎という学者がいます。田中は、第二次世界大戦後、文部大臣、参議院議員、それから最高裁判所長官になります。この田中の東京帝国大学法学部教授時代の一つのエッセイ、『教養』と『文化』の時代を見てみたいと思います（田中耕太郎『教養』と『文化』の時代——明治大正思想史の断片『教養と文化の基礎』岩波書店、一九三七年、四五〇～四五二頁）。

私は研究者が日露戦争の騒ぎが鎮まつた明治四十年前後から欧州大戦の勃発まで即ち大正初年頃までの或る意味に於て興味ある一つの時代が持つてゐる特色を看過してはならないと考へる。一言にして盡せば、此の時代に於て明治初年以來の、国家的生存に差し当り必要な物質的文明及び法律制度以外に文学、哲学、宗教等の精神的文明がほつほつ移植せられたのである。此の間の消息を雄弁に物語るものは、芸術的風格よりも古典の一節を聞きかじつたり、当時未だ人が知らなかつた伊太利あたりの古い画家の名に親しんだりすることを喜ぶやうな、一言で云へば洋書の臭いを嗅いで楽しむやうな興味が先に立つてゐる初期の漱

石の作物である。従来の実際社会及び学界に於ける成功者流の如く何等疑問を懐かないで只管手近かな獲物を追求する態度に対し青年の一部の者は不満を持ち始めた。耽溺以外に興味ない連中は度外視して、学生の或る者には点数の虫であることから超然たること自体が何か非常に価値あるやうに考へられた。彼等は将来の方針とは無関係に個人的修養乃至教養の爲めに、或ひは宗教に、或ひは文芸に、或ひは哲学に馳つた。此の傾向は概ね比較的純粹な持ちの高校時代に止まつて居り、大学及び更に世間に出るに於ては青年時代の單なる理想として回顧せられるに過ぎないのが常であつたが、然し稀には卒業後依然として俗務の側ら出勤の往復の時間を市電の中で希臘語の文典の習得に当ててゐたやうな努力家もあつた。

ここで最初に田中は、研究者が日露戦争の騒ぎが収まつた明治四十年前後から、一つの新しい変化が起つてきていると言います。「明治初年以來の、国家的生存に差し当り必要な物質的文明及び法律制度以外に文学、哲学、宗教等の精神的文明がほつほつ移植せられた」と。それによつて、学生は具体的にどうなつたかと言いますと、「点数の虫であることから超然たること自体が何か非常に価値あるやうに考へられた」と言い、「将来の方針と無関係に個人的修養乃至教養の爲めに、或ひは宗教に、或ひは文芸に、或ひは哲学に馳つた」と言います。もつとも、昭和初期の田中から見ると、この時代の教養志向というのは虚飾と誇張に陥る傾向が強い、その後はその時々西洋の流行に飛びついていただけだと、昭和期の政界、文筆界、学界を、彼は批判します。もちろん学生の多くは立身出世を求めていたり、ここで田中が「耽溺以外に興味ない連中」というやうに、必ずしも真面目な学生生活を過ごさない人もいます。しかし、この頃から国家制度とは別に個人の心持ちを豊かにしようとする傾向が出てくる。これが政治の局面では権力に対して抵抗する自由主義、あるいは一層の参加を求めるデモクラシーの動きとなつて、その後現れていくと言えます。

## ◆ 日露戦争後の対外政策

牧原 先ほど三宅雪嶺が述べた一九〇五年について、「祭日の浮れ気分にて年が暮れたり」という話でしたが、年が明けて一月に桂は辞めるわけですね。その後任に政友会総裁の西園寺に組閣の大命が降下します。以後、桂と西園寺は交互に政権を担い、二人の名をとって桂園時代と呼ばれる時代が、一九一三（大正二年）まで継続します。当時、元老以外の首相候補者はこの二人をもつて他にはなく、二人とも元老の復讐を好まないため、事実上、相互了解のもとで互いに後任を推すことによって桂園時代は続いていきます。そのため、西園寺の二度目の組閣まで元老会議は開かれずに首相は選任されたというわけですね。桂

ロシア	アメリカ
	7月 桂・タフト協定
	10月 日本人移民排斥運動
7月 第1次日露協約	
	11月 高平・ルート協定
	12月 南満州鉄道中立化提議
7月 第2次日露協約	
7月 第3次日露協約	

は政友会との厳しい交渉と妥協によって、予算を編成し、政権を運営し、他方の西園寺は松田正久と原敬という二人の部下に支えられて、ときに桂の側面からの支援を受けながら政権を担当し、徐々に政友会も政権担当能力を身に付けていきました。

そして、この二人には日露戦争後の対外政策で共通した認識がありました。その対外政策を見てみると、思います（表4-1）。まず満州ではポーツマス条約を結びましたが、現地機関として関東総督府、ついで関東都督府が設置され、ここで一般行政と軍務を行い、さらに満鉄を設立して、植民地経営を始動させます。他方、朝鮮半島、韓国に対しては、戦

表 4-1 日露戦争後の対外政策

年	首相 (内閣)	満 州	韓 国
1901	6月 桂太郎		
1902			
1903			
1904			8月 第1次日韓協約
1905		9月 ポーツマス条約	11月 第2次日韓協約
1906	1月 西園寺公望	8月 関東都督府設置 11月 南満州鉄道株式会社設立	
1907		4月 帝国国防方針決議	7月 第3次日韓協約
1908	7月 桂太郎		
1909			1月 伊藤博文暗殺
1910			8月 韓国併合
1911			
1912			

争中から含めて三次にわたる日韓協約を締結して影響力を強め、最終的には併合する形で植民地化を果たしていきます。そして、今度はロシアとは、大正初期まで三次にわたる協約を結んで、相互の利権の確保を狙っていきます。アメリカが中国における機会均等を強く語りかけていく。さらに日本人移民排斥運動が起こり、次第に日本との関係が冷ややかになっていく。このアメリカに対抗するという意味合いを持ちつつ、ロシアと協約が結ばれていくのです。こうして日露戦争後の日本は、東アジアで帝国主義列強の一員として、比較的安定的な対外関係を構築しました。そのうえ新しい国防方針が帝国国防方針として一九〇七年に決議されます。これは、陸軍はロシアを、海軍はアメリカを仮想敵国とするという内容ですが、対外関係は安定的なので、方針の目標はありながら、先送りされていきます。その結果、国防方針が掲げた目標、軍備拡張が桂園時代に伏在する、大きな政治問題になっていくのです。



#### ◆ 桂園時代をどう見るか（一）——桂太郎という政治家

牧原 さて、桂園時代を考えてみたいと思います。御厨先生、まず桂はどういった政治家だったんでしょか。

御厨 元老の次に当たる地位にあつたのですが、彼はおそらく元老たちの話をよく聞き、ニコニコ笑ってポン。つまりニコポンと言われたように、非常に人の扱いに慣れた軍人だったと思いますね。彼は、しかも第一次内閣で五年半やりました。一つの内閣で五年半は戦前で一番長いですからね。これだけ担っている間に、先ほど牧原先生が言われたように、いわゆる世代交代が進んでいって。しかも政友会という相手とはずっと交渉し続ける忍耐力があつた。これでやがてポーツマス条約のときに政友会が反対をしない方向に妥協を図っていくわけです。そして、桂と政友会の西園寺公望とで、交互に政権を授受していく体制ができあがっていくのですね。彼はいろんなところで交渉をする。桂は交渉力が非常に高い人だった気がします。

牧原 桂は、もともとは医者であつて植民地官僚として力を發揮する後藤新平を、重用します。彼を閣僚に迎え、植民地政策や鉄道政策を展開します。この後藤新平が、猛烈なアイデアマンなんです。アイデアが湧いてくると我慢できない。一度桂に献策をして、帰り道に何やら思い浮かぶとまた桂の所に戻る。それを何度か繰り返していたそうなんです。この後藤について桂はこう言っているんですね（『東京朝日新聞』一九二九年四月十三日）。

後藤の持つてくるものは、十のうち九までは始末におへない出たら目だが、あとの一つは大した妙案だ。後藤という人物があまり妙案でないものも妙案も思いつくというわけですが、逆に言う、十のうち九の

でたらめを桂は聞くんですよ。聞き上手ぶりがすごいなと思うのです。やはりそれが桂であり、今、先生がおっしゃったような交渉能力の高い政治家の一面がここによく表れていると思います。

#### ◆桂園時代をどう見るか(二)——陸軍と議院

牧原 さて、その桂と西園寺の桂園時代、これが安定的に継続していくように見えますが、この時代をどう見たらいいんでしょうか。

御厨 長州閥はまず陸軍を制しています。その長州閥は、山県有朋、桂太郎、寺内正毅（てらうちまさひさ）と順次トップが替わっていきます。普通「我が党内閣」というのは自分の党派の利益を最優先すると言われています。しかし、長州も「第二流」の桂太郎になると、特に桂内閣の時代には実はこのときそんなに陸軍の権益と言いますか、桂は陸軍の軍拡ということをやらないですね。桂には陸軍の党派の利益が、必ずしも国家統治の観点から見るとプラスにならぬという考えがありました。桂は、非常に交渉能力が高いので、いろんなことがわかってしまって、この陸軍の利益だけを代表できないと思う。ところが、そこが先ほど牧原先生も言われたように、ほころびになる。つまり、このまま桂と西園寺の政権が続いていくと、どうも陸軍の軍拡ができない。海軍はやるけれども、陸軍はできないね、みたいな話になってくるんですね。

だから、この安定構造というのは、自分のところの利益を実現したい、そのためにこの体制が邪魔だと思わない限りは、非常にうまく機能していたということですね。外交関係で先ほど説明があったように、安定している間はこの関係は崩れない。桂も基本的には緊縮財政に賛成しますから、それで妥協しつつやっていくことになるんじゃないでしょうか。

牧原 それともう一つ、やはり陸軍と並んで議院、政党、とりわけ政友会と西園寺の役割なんですけど、

こちらはいかがでしょうか。

**御厨** 西園寺は西園寺で、議会主義というものはかなり理解がありましたから、ここでもそれを安定させたいと思うわけです。基本的には桂が貴族院を押さえ、西園寺の政友会が衆議院を押さえていけば、貴族院の提携ができて政権が維持できることになります。それはある意味で政友会の政権政党への第一歩になりますね。そこを西園寺は代表したと言えるんじゃないでしょうか。

**牧原** 西園寺を中心とした政友会の中、松田正久や原敬らの党幹部がいますが、政友会の中は一体どうなっていたのでしょうか。

**御厨** 基本的には二頭政治だったと思うんですよ。ただ、原敬のほうは日記も書簡もたくさん残っていますから、彼が西園寺のもとですべてを差配したように言われています。しかし西園寺のちに総裁を辞めた後、松田にするか原にするか、けっこういろんな議論があったところで、松田が死んでしまいますから原になるんです。したがってやっぱり原と松田は、政党の二つのあり方を人格的に代表していて、たぶん原が組織や制度というものを拡張していくほうを代表し、松田のほうは漠然たる、昔よくあったような民党的人気、これをずっと継承していたんじゃないかという感じはします。

**牧原** 伏見岳人先生の研究で、この桂園時代の議会を見てみると、当時、鉄道敷設が政党の、特に政友会の大きな要求であり、最初は幹部からではない鉄道敷設決議案が出されているのに対して、やがて党幹部の原・松田による決議案が提出されていく（前掲『近代日本の予算政治一九〇〇―一九一四年』）。つまり、政友会において、幹部主導の鉄道敷設要求手続きが制度化されていき、他方で超党派の鉄道敷設の建議も出されるのですが、やがて政友会は単独で建議を出していく。しかも、地方の決議を積み重ねた後に、鉄道敷設について予算編成を進める。こういう体制を整えていくという、重要な指摘があります。

こうして政友会が地方の要求を独占的に掌握して、それを予算に結び付けるという仕組みが西園寺内閣のもとで確立していくわけです。その意味で、政友会が、とりわけ原の力が大きいのですが、予算編成能力を身につけて、統治政党としての能力を強化していきます。そういった桂園時代で、貴族院のほうは、いかがでしょうか？

**御厨** これは絶望的になるわけですね。政友会が多数を占め、貴族院でも研究会がやがて親政友会系の大きい戦力になります。そこと結ぶことによって少数派は取り残されます。衆議院の野党の中も、より民党的になるか、あるいは政友会にくっついていくかということと割れますね。貴族院は、何と言っても日露戦争の頃までは対外強硬派がけっこう力を持っていました。しかし、これもその後の状況で変わってきます。いわば貴衆両院各々の二つの強大な勢力が提携することによって取り残されたものが、どのような展望をもって合従連衡していくのかということが、この先の課題になるんだろうと思います。

#### ◆桂園時代の終わりと新党運動

**牧原** 第三次の桂内閣が登場します。桂はその前にいったん内大臣になっていました。久しぶりに元老会議が開かれて、内大臣から首相への就任が認められて、桂が首相になる。すると、第二次西園寺内閣が倒れるときの陸軍の二個師団増設要求があり、さらに陸軍出身の桂が内大臣から首相に就任することで、世論の反発が強まり、第一次護憲運動が起こります。このあたりについて、また御厨先生から少しお話をいただきたいと思います。

**御厨** はい。今お話がありましたように、陸軍の二個師団増設問題。これは先ほどちょっと言いましたように、どうも桂と西園寺のもとでは軍拡ができないということで、特に長州に反発を持っておりました薩

摩の上原勇作が陸相になる。この上原が二個師団増設問題を提起します。ところが当時の第二次西園寺内閣は行政整理をやりたいたいと言っておりましたので、この主張を認めなかったわけですね。そこで上原は単独辞職をいたしまして、陸軍が後任を出さないということで、この内閣がつぶれる。そして桂に三度目の大命が降下したので、桂自身の思惑とは別に、陸軍ないしは長州閥の横暴であるということになって、第一次護憲運動が起こります。桂の去就をめぐって騒擾事件が起こります。結局、桂内閣は三カ月で総辞職せざるをえなくなる。要は、こうした中で桂園内閣と言われた桂と西園寺の阿吽あうんの呼吸でやっていくという体制は壊れ、実は政友会に頼れなくなった桂はこの後、新党運動を起こします。その新党運動についてどうでしょうか。牧原先生のほうから、少し具体的なことをご紹介いただけますかね。

**牧原** これについては、桂の書簡、そして書簡に対する山県の返信があります。『桂太郎発書翰集』（千葉功編、東京大学出版会、二〇一一年）と『桂太郎関係文書』（千葉功編、東京大学出版会、二〇一〇年）です。この中で、今の大正政変についての書簡をご紹介したいと思います。

まず桂が山県に宛てた手紙です（資料4-1参照）。ここでは、桂は衆議院が厳しく彼と対立したときに、「彼等之我に対する体度之如何は彼等に一任し、一意専心真直線に進行するの外手段無之事と決心」。「突貫」という言葉が出てきますけれども、「突貫其功奏し候得は天下之幸福なるは勿論」。つまり衆議院を解散せずに臨むということなのです。しかしこの先があります。「唯々其時こそ」という、この部分なのですが、「御内話仕置候前後之所置を取るのを時機を早め」とあります。この御内話というのが、新党を組織するということであり、この手紙を出す前に桂は山県に、新党組織について相談しているのです。これに対して、今度は山県がどのように返信したかが残っています（資料4-2参照）。ここでまず山県は「今日に於ては如貴論国家救済之策、中央突貫之外活路無之情勢に立到」というわけですが、しかしそ

旧年末御別袖後不伺御起居絶無沙汰仕候処、爾来益御清栄被為在奉大賀候。陳都門之近況は東京より閣下に伺候輩并に新聞紙等に爾時々御承知被為在候半。

前内閣即ち政友会に直接關係を有し居候中央新聞及び日本の如きは不相変悪筆を以て天下之人心を動揺せしめんと頻りに漁居申候。併し爾他之新聞紙は多少筆鋒〔法〕を變し善悪相半位に其筆を改め參り申候向も相見へ申候。兎に角自己之罪惡を顧みず其の過を人に譲らんとする極々卑き心中は論すへきの限りに無之候。

實際之情況は未だ判然不仕候へ共、都門と田舎とは大ぬに其趣を異にするもの有之候哉に被察申候。小生は彼等之我に対する体〔態〕度之如何は彼等に一任し、一意専心真直線に進行するの外手段無之事と決心仕居申候。突貫其功奏し候得は天下之幸福なるは勿論に候得共、若し突貫事を破るも亦国家之不幸とも不相考候。唯々其時こそ預〔予〕而御内話仕置候善後之所〔処〕置を取るの時機を早め可申候。何れ之道今期之議會は差したる事變も有之間敷、大正三年度之議會は国家將來之為め充分之決心を要するの時と存申候。殊に小生之苦心仕候ものは国家將來之基礎を確定せすして中途

再び内閣之瓦解を生ずる如き事有之候ては、之れぞ国家之基礎は破解〔壞〕に至るへき事、過去之情勢に照して疑ひなきもの、如し。此辺に付ては考慮に考慮を重ね候半而は唯々主義とか綱領とか学者的議論位之ものに無之事と被存申候。真に国家之前途の為め熟考を要し候事は申上迄も無之事に候。先は余り御無音仕候間、御起居伺旁寸堵〔稽〕。早々拜具

大正二年一月十二日

葉山に而 太郎

小田原に而 山県老公閣下

追而小生至而無事壮健に罷在候間、乍余事御休意

願上候。

〔千葉功編「桂太郎發書翰集」東京大学出版会、二〇一二年、四三二頁〕

のあと、いろいろ熟考を試みたということを最後に言ってるんですね。「御対談致したる策之外別に名按も無之候」と言っています、つまり桂の言う新党組織以外に特に名案はないんじゃないかということをも山県は言って、要するに桂の新党組織を消極的にはあるけれども、とりあえずは認めたと、読めます。

もともと山県は政党というものに対して敵対的であり、三党鼎立というように、政党が議会内で三すくみの状態にあるよう仕向けて、これを外から操縦して、議会を乗り切っていくべきだと考えていたわけで、陸軍から出た桂が新党組織をつくることに困惑していたのです。桂の勇ましさを前にして、必ずしも積極的には同意しえなかったことがわかるやり取りです。

#### ◆激動の時代——戦争と政党

**御厨** こうやって見てくると、二十世紀の初めは、やっぱり安定を求めながらも激動の時代だったと思いますね。国民は平和到来かなと思っただけでも、実際には日露戦争が遂行される中で政友会という政党が育っていく。戦争と政党がお互いに車の車輪のようになって、日本国家をまわしていくのが非常に特徴的だと思うんです。そのあたりはどうですか。

**牧原** 日比谷焼き討ち事件のような騒擾がありました、一面ではその後落ち着いていく気分もあります。桂園時代というかたちで表向きは安定しているのですが、相対的安定期の中にはいろいろな要求がたまっている。そうした要求というのが、あるときに政治の場で噴出してくる。それが通常のルーティンの議会審議とか、内閣の意思決定にうまく乗せられない場合は、二個師団増設であるとか、あるいは今の第一次護憲運動とかというかたちで噴出する。やはり、その起源をずっとたどっていくと、日露戦争が大きな原因をなしていたと言えるのではないのでしょうか。

葉山御投函之雲箋、昨夕接手敬読。先以新歳御健勝被為涉、欣賀之至に候。扱客臘分袖政海之情況は依然、

閩族退治、憲政擁護之名を以て旗幟（幟）を立、人民を誘惑激昂せしめ、政府をして包圍攻撃之渦中に陥らしめんと之の作戦計画は倍歩を進むるの激勢を加へ、今日に於ては如貴論国家救済之策、中央突貫之外活路無之情勢に立到、断然たる御決心を拝承し、為国家遺憾無之候。然して突貫後之政策は、政府は公明正大主義を国民一般に貫徹せしむるの方法を講ずること尤緊要と存候。其他善後策種々手段方法を講究施行するは勿論に候得とも、一般人民が誘惑報動（導）せられたる誤聞を、覚破警醒せしむること第一と信申候。昨日其日菴主人来訪、政友会之近情及び国民派其他之状態を逐一伝承。実に国家を度外視して私利を図る内情は、恰も百鬼夜行之状態に不異候。猶其後熟考を試たれ共、客臘御対談致したる策之外別に名按も無之候。此際勿論御疎は有之間布候へ共、今日如此形勢に推移したる概要、又之に処するの大意を予しめ御奏聞被成置事は必要之事歟と為念申添候。実に内外に對し日夜御心労不堪遠察候。猶時下日々寒氣激甚と相成、宝軀為国家

御自愛專祈。草々復

一月十四日

古稀菴にて 有朋

桂老公閣下内啓

猶各県之情況に付而は至急數人を派出し、各県下之真状を広く見聞為致候事急務と存候。遠眼鏡之判断は違算多く、且今日之県情は昔と異なり知事又は事務官、警察官等も兎角人に所見を異にしたる狀況は屢承候事に候。又地方行政上知事其他之監督權を法規通りに実行致させ度事に候。平田其他には將來之政略を御熟談相成置度、是又肝要と存候。右氣付候儘序ながら御參考まで書添申候也。

（千葉功編『桂太郎関係文書』東京大学出版会、二〇一〇年、四四八頁）



**御厨** 例の非常特別税制とか税法とかによって、あつという間に納税制限がどんどん解かれて、有権者が増えていきますよね。議会、あるいは政党の基盤も大衆化していくし、大衆化していくものに対して政友会が鉄道、河川、道路、いわゆる地方固有の利益を国家全体の利益体系の中に組み込みながら津々浦々に造つていかなければならない。そのことで逆に政友会という政党を強化していく。そういう流れにも表れているわけで、戦争が起こることによって、実は有権者が増える。税金の問題もありますけどね。これもこの時期の大きな特徴の一つだと思います。その点で言うと、政治史というのは、単に上つ方の権力闘争の話だけではなくて、やっぱり国民全体を巻き込んだ動きとか、あるいは国民の感情とか、あるいは社会の動揺とか、そういうものを一緒に扱って初めて成立する、かなりダイナミックなものなんじゃないかという感じがあらためてしたんです。その点は構造的に見ておられる牧原先生、どうですかね。

**牧原** 国民から強い要求が出てくる、あるいは出てきうる状態があつて、これに対して制度がどう動くかというときに、やはり政党を作らないとどうしようもない。桂でさえも思うし、山県もそれを消極的に是認する。政友会は第一次護憲運動に対しては、これまた消極的ながら、協力していくわけですよ。政党が国民の要求に應えていく中で、次第に應える政党と応えない政党に分かれていくのが、このあとの展開であるという意味では、大正政変はその後を予示している事件なのではないかと思えます。

それでは、今回はここで終わります。

## 事項索引

## ●あ行

- 新しい中間階層(新中間層) 318, 321, 350, 351, 359, 362  
 アベノミクス 479-481, 485, 486, 490, 494  
 安政の大獄 47  
 安保法制 483, 496, 498  
 安本 →経済安定本部  
 一党優位体制 407  
 岩倉使節団 55  
 売上税導入 386  
 オイル・ショック →石油危機  
 王政復古の大号令 34, 48  
 大磯御殿 28, 218, 219  
 大蔵省 68, 208, 254, 266, 393, 432  
 大阪維新の会 473  
 大津事件 64, 69  
 沖縄県公文書館 23  
 沖縄米兵少女暴行事件 427  
 沖縄返還 288, 294, 297, 300, 309, 312  
 オーラル・ヒストリー 6, 20, 21, 23, 29, 302, 340, 375-377, 380, 381, 402, 410, 428, 431  
 組織の—— 22

## ●か行

- 海軍 99, 111, 119  
 ——軍縮 135, 138  
 改元 105, 387, 397, 487  
 外交三原則 232  
 改進黨 →立憲改進黨  
 外政審議室 359  
 格差是正 425  
 革新倶楽部 137, 153  
 革新自治体 286, 290, 296, 306, 352, 365,

370

- 革新首長 305, 352  
 各府省連絡会議 472, 497  
 環境庁 296  
 環境問題 296, 304, 365  
 韓国併合 104  
 関税自主権 83  
 官邸 452  
 ——主導 417, 437, 480, 502  
 ——の機能強化 405  
 関東大震災 136, 147, 150, 151, 454, 471  
 官僚 164, 178, 184, 214, 219, 256, 267, 272, 451, 466  
 ——主導 479  
 大蔵—— 267, 268, 343, 418  
 革新—— 229  
 官邸—— 502  
 宮中—— 186  
 新—— 184  
 内務—— 380  
 法制—— 218  
 官僚制 5, 64, 139  
 省庁—— 5  
 消えた年金問題 425, 443, 462  
 議会 65, 121, 244  
 機関車論 326, 345  
 貴族院 63, 65, 76, 77, 102, 122, 123, 135, 171  
 『木戸孝允日記』 54  
 希望の党 484  
 九・一一同時多発テロ事件 438  
 旧制高校 268  
 教育基本法 215  
 行財政整理 160  
 共産党 →日本共産党

- 行政改革 139, 318, 349, 354-356, 371, 377, 428, 436  
 — 会議 419, 421, 433  
 行政官の首相 421  
 行政刷新会議 451, 465  
 行政整理 64, 124, 165, 166  
 「共謀罪」法 482  
 拳党体制確立協議会(拳党協) 322, 323  
 義和団事件 97, 111  
 緊急事態宣言 489  
 黒い霧解散 289  
 軍部 64, 74, 140, 164, 165, 187  
 軍部大臣現役武官制 75, 131, 187  
 桂園時代 108, 120, 122, 126  
 経済安定本部(安本) 204, 207, 255  
 経済協力開発機構(OECD) 258  
 経済財政諮問会議 423, 425, 437, 439-441, 479  
 経済社会発展計画 299  
 警察官職務執行法(警職法)  
 — 改正案 232, 234, 248  
 — 反対運動 227  
 『蹇蹇録』 84, 88, 89  
 憲政会 129, 130, 137, 139, 153, 160  
 憲政常道論 156  
 憲政党 66, 74, 78, 90  
 憲政の常道 131, 137, 152, 166  
 憲政本党 74, 103, 134  
 憲政擁護運動 → 護憲運動  
 原爆ドーム 191  
 原発事故 455, 467  
 憲法改正 216, 228, 242, 258, 356, 474, 488, 497  
 憲法制定作業 67, 201  
 憲法調査会 228, 258, 281  
 権力の館 16  
 元老 75, 102-104, 110, 120, 129-133, 135, 137, 157, 159, 164, 168, 178-180  
 — 会議 74, 95, 98, 105, 123  
 五・一五事件 140, 164, 177, 179, 180  
 公害 273  
 — 問題 296, 299, 305  
 江華島事件 61  
 公職追放 200, 202, 208, 209, 213, 215  
 構造改革 417, 421, 423, 425, 439, 441  
 宏池会(池田派) 269, 270  
 皇道派 170, 178  
 高度経済成長 252, 255, 263, 281, 318, 362  
 公武合体 33, 37  
 公文書 23  
 公明党 416, 420, 426, 435, 472, 478, 482, 501  
 五箇条の誓文 36, 48  
 古稀庵 11, 27  
 国際平和協力法案 390  
 国際連盟 151, 167, 168, 171  
 — 脱退 184  
 国際労働機関(ILO)八七号条約批准 258, 280, 288  
 国鉄 → 日本国有鉄道  
 国土総合開発計画 273  
 国土庁 320  
 国土利用計画法 320  
 国防会議 228  
 国民協同党(国協党) 202, 203, 205, 208  
 国民所得倍增計画 252, 255, 262, 267, 272, 282  
 国民新党 451, 452, 463  
 国民生活安定緊急措置法 334  
 国民党 → 立憲国民党  
 国民投票法 485  
 国民年金制度 232  
 国民年金法 248  
 国民福祉税構想 393, 411, 432  
 国民民主党 208  
 護憲運動(憲政擁護運動) 100, 105  
 第一次—— 123, 126, 131  
 第二次—— 137, 151, 153  
 護憲三派 130, 137, 153  
 五五年体制 236, 238, 282, 286, 384

五相会議 168  
 国家安全保障会議 480, 496, 498  
 国家安全保障局 480  
 国会開設の請願書 43  
 国会期成同盟 43  
 国会パブリックビューイング 504  
 国家戦略会議 472  
 国家戦略室 451  
 米騒動 133, 143  
 五稜郭 50

● さ 行

『西園寺公と政局』 29, 158, 180, 182  
 再軍備 208, 214, 221, 228, 241, 242  
 災後 454, 470, 471  
 最高顧問会議 356, 359  
 最高裁判所 292, 293  
 財政構造改革会議 419  
 財政再建 363, 396, 472  
 裁判官人事 292  
 さきがけ →新党さきがけ  
 坐漁荘 180  
 桜を見る会 488, 490  
 薩英戦争 47  
 『佐藤榮作日記』 19, 301, 303  
 サミット →先進国首脳会議  
   ボン・—— 327, 345  
   ロンドン・—— 326, 345  
 三月事件 166, 177  
 参議院 257, 320, 322, 353, 389, 393, 398,  
   401, 416, 420, 428, 435, 441, 443, 448, 463,  
   484, 503  
 参議院議員通常選挙 232, 233, 248, 320,  
   321, 326, 330, 384, 387, 398, 401, 416, 419,  
   420, 426, 428, 433-436, 443, 448, 449, 451,  
   462, 481, 488  
 三国干渉 89  
 三国同盟 174  
 サンフランシスコ講和会議 208, 214, 220  
 サンフランシスコ講和条約 236, 241

三位一体改革 437, 441  
 椎名裁定 339  
 自衛隊海外派遣 389  
 資源外交 336  
 事前審査制 256, 457  
 ジビル・ミニマム 290  
 シベリア出兵 133  
 司法権の独立 293  
 自民党 →自由民主党  
 事務次官等会議 451, 472, 497  
 シーメンス事件 131, 167  
 下関事件 47  
 下関条約 87, 88  
 社会開発 261, 283, 288, 296, 299  
 社会大衆党 170  
 社会党 →日本社会党  
   ——統一 226, 227, 239, 240  
 社会保障と税の一体改革 457  
 社会民主党(社民党) 416, 451, 452, 461,  
   463  
 十月事件 166, 177  
 衆議院(戦前) 65, 67, 70, 75, 78, 102, 122,  
   131-133, 135, 142, 170  
 衆議院(戦後) 206, 209, 214, 225, 234, 236,  
   257, 285, 296, 322, 339, 353, 372, 391, 408,  
   419, 420, 442, 484  
 衆参同日選挙 350, 363, 370  
 住専処理法 427  
 集団的自衛権 389, 481, 482, 485, 498  
 自由党(1881-84年) 44  
 自由党(1891-98年) →立憲自由党  
 自由党(1950-55年) →民主自由党  
 自由党(2016-19年) 435, 436, 449  
 自由民権運動 44, 68, 78  
 自由民主党(自民党) 226-228, 231, 232,  
   236, 238, 248, 253, 256, 257, 269, 273, 282,  
   292, 329, 347, 362, 387, 391, 393, 398, 416,  
   417, 420, 429, 433, 437, 443, 449, 472-474,  
   478  
   ——都市政策大綱 289, 306

- 首相公選制 358, 359, 374, 422  
 首相的官房長官 422  
 首都高速道路公団 274  
 攘夷運動 32, 33  
 生涯設計計画 321  
 小選挙区制 228, 320, 383, 389, 405, 407, 416, 432, 474  
 小選挙区比例代表並立制 389, 394, 416, 427  
 省庁再編 419, 421, 428, 435, 440, 502  
 消費税 457, 481  
 —増税 465, 488  
 —導入 386, 396, 399, 400  
 消費文化 266, 350  
 条約改正 38, 44, 67, 70, 83  
 昭和電工事件 198, 205, 319  
 女性運動 293  
 資料 6  
 史料 7, 17  
 辛亥革命 104  
 新ガイドライン →新・日米防衛協力のための指針  
 新型コロナウイルス感染症 488, 489, 507, 508  
 審議会 139, 364, 369, 371, 373  
 —政治 370  
 行政制度— 160  
 新自由クラブ 322, 350  
 新宿騒乱事件 291  
 真珠湾攻撃 174, 189  
 新進党 416, 461  
 新生党 391, 394, 416  
 新全総 →新全国総合開発計画  
 新中間層 →新しい中間階層  
 新党さきがけ(さきがけ) 367, 385, 391, 393, 394, 407, 416, 431-433, 435, 461  
 進歩党(1896-98年) 73, 78, 89, 90  
 枢密院 67, 99, 113, 136  
 スト権スト 322, 339  
 征韓論 39, 56  
 政権交代 461, 464-466, 474, 490  
 2009年— 450, 461  
 政治改革 367, 385, 387, 389, 391, 396, 406, 409, 427, 474, 497  
 —関連法案 390, 393, 408, 411  
 —大綱 387, 398  
 政治史学 2, 4, 27, 28  
 政治資金制度改革 383, 398  
 政治主導 451, 463, 479, 480  
 政治的暴力行為防止法案 257  
 政党 66, 67, 69, 72, 78, 92, 93, 101, 103, 121, 126, 139, 140, 155, 159, 164, 179, 199, 236, 244, 474  
 —政治 152  
 —内閣 74, 131, 143, 179  
 税と社会保障の一体改革 472  
 西南戦争 54, 56-58  
 政友会 →立憲政友会  
 政友本党 153  
 世界恐慌 164, 184  
 石油危機(オイル・ショック) 290, 320, 329, 333, 335, 336, 345, 362  
 全学共闘会議(全共闘) 291  
 —運動 286, 307  
 選挙干渉 69, 80, 138, 143  
 選挙制度改革 320, 324, 354, 392, 398, 407  
 参議院— 349, 353  
 選挙法改正 75, 228  
 全国総合開発計画 274  
 新—(新全総) 288, 289, 306  
 戦後七〇年談話 499  
 先進国首脳会議(サミット) 318, 358  
 戦争 2, 126  
 全通東京中郵事件判決 292  
 全農林警職法事件判決 293  
 全方位平和外交 325, 326, 345  
 相互防衛援助(MSA)協定 242  
 総裁選挙(自民党) 233, 243, 248, 258, 261, 270, 287, 288, 296, 298, 317, 319, 320, 328-332, 343, 344, 346, 356, 359, 371, 390, 419,

420, 424, 436, 437, 478  
 総裁予備選挙(自民党) 325, 327, 328, 331,  
 344, 354  
 総選挙(衆議院議員総選挙) 68, 71, 77, 78,  
 102, 138, 140, 153, 202, 206, 208, 227, 232,  
 248, 262, 289, 296, 323, 329, 339, 384, 391,  
 408, 412, 416, 427, 443, 448-451, 461, 462,  
 478, 481, 492-494, 496, 500  
 族議員 256  
 祖国復帰運動 295, 309

## ● た 行

第一次世界大戦 132, 142, 144  
 大学紛争 291, 293, 299, 307  
 対華二十一カ条の要求 132, 142  
 大規模小売店舗法(大店法) 388  
 大逆事件 104  
 大臣主導 502  
 大臣政治 451  
 大政奉還 34  
 大政翼賛会 173, 194, 202  
 大選挙区制 75  
 大同団結運動 65-67  
 大統領的首要 359, 360, 373, 374, 379, 380,  
 421, 439  
 第二次世界大戦 164  
 第二次臨時行政調査会(第二臨調) 354,  
 363, 364, 371  
 大日本帝国憲法(明治憲法) 44, 63, 65-68,  
 77, 91, 159, 164, 192, 194, 447  
 太平洋戦争 3, 174, 189, 212  
 大本営 85  
 台湾出兵 40, 60  
 田原坂 56, 57  
 塘沽停戦協定 168  
 地下鉄サリン事件 418, 430  
 地券 54  
 知事公選 139  
 地租改正 38, 42, 54  
 地方の時代 352, 365

地方分権 139, 406  
 —改革 418  
 —推進一括法 418  
 中選挙区制 389, 407  
 調査会 139, 160  
 長州閥 121  
 超然主義 65, 66, 77, 91  
 朝鮮戦争 208  
 徴兵令 38, 54  
 長老会議 324, 327  
 帝国議会 63, 64, 69, 70, 73, 77, 78, 81, 82,  
 89, 170  
 帝国国策遂行要領 174  
 帝国国防方針 102, 119  
 荻外荘 28  
 テレポリリティクス 438  
 テロ対策特別措置法 438  
 田園都市構想 351, 363, 365  
 —研究グループ 351  
 電電公社 →日本電信電話公社  
 天皇機関説 169  
 —事件 185  
 天皇制 140, 226  
 象徴—— 206, 487, 506  
 天皇メッセージ 487, 505  
 党改革実施本部 325, 326  
 東京オリンピック 260, 274, 281, 488  
 東京佐川急便事件 390  
 東京都政 368  
 党近代化 351, 354  
 統帥権 164  
 —干犯問題 139, 156  
 統制派 170, 178  
 統治機構改革 500  
 党風刷新懇話会 323  
 党風刷新連盟 258, 323, 324  
 都教組事件判決 292  
 独占禁止法  
 —改正問題 321  
 —強化 388

特定秘密保護法 482, 498  
 虎の門事件 136, 150

### ● な 行

内閣機能の強化 359, 419  
 内閣人事局 480, 497  
 内閣制度 44, 67  
 内閣調査局 169, 170, 184  
 内閣法制局 343, 482, 498  
 内国勲業博覧会 41  
 内政会議 168  
 内政審議室 359  
 内務省 39, 215  
 長沼ナイキ訴訟 292  
 南部仏印進駐 174  
 ニクソン・ショック 296, 313  
 二個師団増設(問題) 104, 124, 131, 133  
 二大政党(制) 154, 155, 238, 266, 286, 474  
 日英同盟 98, 109, 110  
 日独伊三国軍事同盟 173, 188  
 日独伊防共協定 172  
 日独防共協定 172  
 日米安全保障条約 209, 241, 242, 249, 296, 312, 430  
 —改定 226, 232, 233, 242, 243  
 —改定反対運動 227  
 日米安保共同宣言 419  
 日米経済摩擦 404  
 日米構造協議 388  
 日米修好通商条約 32, 33  
 日米繊維交渉 296, 313  
 日米防衛協力のための指針(ガイドライン)  
 —関連法 420  
 新・—— 427, 434  
 日米諒解案 174  
 日米和親条約 32  
 日露協商 98, 109  
 日露協約  
 第一次—— 102  
 第三次—— 104

日露戦争 99, 126  
 日韓基本条約 288  
 日韓協約 119  
 第三次—— 102  
 日記 5, 174, 301, 312, 409, 411  
 日清戦争 71, 80, 84, 89  
 日ソ共同宣言 228, 243  
 日ソ国交回復 242  
 日ソ中立条約 174  
 日中国交正常化 336  
 日中戦争 164, 171, 172, 178, 188  
 日中平和友好条約 326, 327  
 日朝修好条規 61  
 二・二六事件 178, 186  
 日本維新の会 484  
 『日本改造計画』 405  
 日本共産党(共産党) 208, 215, 289  
 日本経済再生本部 479  
 日本国憲法 206, 213, 259, 447, 474  
 日本国有鉄道(国鉄) 354, 357  
 日本社会党(社会党) 202-206, 208, 209, 213, 228, 236, 238, 239, 244, 260, 263, 272, 289, 353, 387, 391-394, 401, 417, 429-433, 435, 503  
 日本自由党(1945-48年) 199, 202, 203, 205, 209, 236  
 日本人移民排斥運動 119  
 日本新党 384, 385, 391, 392  
 日本進歩党(1945-45年。47年より民主党に改称) 199, 202, 203, 205, 494  
 日本電信電話公社(電電公社) 354, 357  
 日本民主党(1954-55年) 210, 222, 226, 228, 236, 239, 242  
 『日本列島改造論』 331  
 日本労働組合総連合会(連合) 387

### ● は 行

廃藩置県 36, 37, 53  
 幕藩体制 46  
 箱館戦争 50

鳩山ブーム 226  
 派閥 269, 270, 324, 346  
 『原敬日記』 18, 19, 134, 146  
 阪神・淡路大震災 418, 430, 454  
 版籍奉還 53  
 藩閥 72, 91, 97  
   — 政府 77  
 蛮勇演説 69, 81, 113  
 非核三原則 295  
 東日本大震災 448, 454, 467, 473, 507  
   — 復興構想会議 467-469, 472  
 東山旧岸邸 245  
 日の出山荘 360, 374  
 日比谷焼き討ち事件 113, 114, 126  
 婦人参政権 139, 160, 201  
 普通選挙 153, 154, 160  
   — 運動 130  
   男子— 138  
 普通の国 391  
 普天間基地 463  
   — 返還合意 419, 427, 433  
   — の移転問題 463  
   — の県外移転 452  
 プラザ合意 350  
 文化の時代 351, 363  
 文官任用令改正 91  
 平和維持活動(PKO) 390  
   — 法 390, 408  
 平和問題研究会 372  
 ベルシャ湾掃海艇派遣問題 360, 378  
 保革伯仲 320, 321, 329, 347, 362, 363  
 北部仏印進駐 173  
 保守合同 226, 236, 238-240  
 戊辰戦争 35, 48, 49  
 ポツダム宣言 175, 197, 200, 212  
 ポーツマス講和会議 99, 112  
 ポーツマス条約 112, 118  
 骨太の方針 423, 437

## ●ま行

マイタウン東京構想 369  
 マッカーサー草案 218  
 松本案 202, 218  
 『松本剛吉政治日誌』 158  
 マドンナ旋風 384  
 マニフェスト 448-451, 463, 465  
 満州国 168, 172, 178, 184, 244  
 満州事変 151, 153, 164, 166, 177, 178  
 満鉄 →南満州鉄道株式会社  
 三木おろし 339  
 水資源開発 274  
   — 関係二法(案) 256, 275  
 三井三池闘争 256  
 密約 312, 344  
 南満州鉄道株式会社(満鉄) 102, 118, 136, 166  
 民営化  
   国鉄— 354, 357  
   電電公社— 354, 357  
   道路関係四公団の— 423, 437, 441  
   郵政(事業)— 423, 424, 437, 441, 443  
 民主社会党(民社党) 257, 260, 263, 387  
 民主自由党(民自党。1950年より自由党に改称。) 199, 205, 206, 208, 209, 214, 226-228, 236, 242  
 民主党(1947-50年) →日本進歩党  
 民主党(1996-2016年) 420, 426, 443, 448, 449, 451, 457, 461-465, 472, 484, 494, 500, 501  
 民進党 484  
 民政党 →立憲民政党  
 民撰議院設立建白書 39  
 民党 68, 69, 74, 78, 80, 82, 90, 91  
 村山談話 418  
 無鄰菴 98, 111  
 明治憲法 →大日本帝国憲法  
 『明治天皇紀』 17, 86  
 明治六年の政変 56, 60



メディア 146, 304, 411-414, 444, 445, 451,  
454, 463, 490, 504

### ● や 行

野党ヒアリング 504

郵政解散 441, 443

郵政選挙 461

世論 144

四〇日抗争 344, 347, 352

### ● ら 行

陸軍 111, 120, 121, 131, 132, 170, 172, 177,  
178, 187

リクルート事件 387, 396, 397, 400

立憲改進黨(改進黨) 44, 65, 70, 78, 89, 199,  
242

立憲国民党(国民党) 104, 105

立憲自由党(1891年より自由党に改称)  
65, 66, 68-71, 73, 78, 89, 90, 93

——土佐派 69, 79

立憲政友会(政友会) 67, 75, 92, 93, 97, 100,  
103-106, 108, 118, 120-123, 126, 129-132,  
134-139, 143, 151, 153-155, 158, 159, 167-  
171, 179, 185, 240

立憲同志会 106, 129, 132, 134, 143

立憲民主党 484

立憲民政党(民政党) 137-140, 153-155,  
158-160, 168, 170, 171, 179, 185, 240

立身出世主義 116

リットン調査団 151, 167, 168

吏党 68

領事裁判権 32

臨時教育審議会 364, 371

臨時行政調査会 259, 281

冷戦 214

——終結 384, 388, 398

連合 →日本労働組合総連合会

連合国軍最高司令官総司令部(GHQ) 198,  
201-203, 205-207, 209, 218, 254

——経済科学局 205, 207

——民政局 198, 203, 206

鹿鳴館 44

ロッキード事件 317, 324, 328, 331, 339,  
346, 350, 354, 359, 362

ロンドン海軍軍縮会議 138, 165, 169, 183

ロンドン海軍軍縮条約 139, 156, 158

### ● わ 行

ワシントン会議 135, 165

湾岸戦争 384, 388, 398, 402, 403

### ● アルファベット

GHQ →連合国軍最高司令官総司令部

ILO →国際労働機関

LT 貿易 280

MSA →相互防衛援助

OECD →経済協力開発機構

PKO →平和維持活動

## 人名索引

## ● あ 行

- アイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower)  
233, 243
- 愛知揆一 288, 320
- 青木周蔵 52
- 浅沼稻次郎 227, 228, 238, 240, 253, 257,  
262
- 浅利慶太 360
- 芦田均 5, 198-200, 204-206, 213
- 飛鳥田一雄 289, 305
- 麻生太賀吉 207
- 麻生太郎 417, 425, 426, 443, 449, 478, 496
- 安達謙蔵 166
- 安倍晋三 417, 425, 443, 462, 473, 478-486,  
488-490, 492, 494-496, 498-500, 503, 506-  
508
- 安倍晋太郎 383, 396, 402, 407, 436
- 阿部信行 172, 188
- 甘利明 478, 479, 489, 495
- 荒木貞夫 167-170, 184, 185
- 有沢広巳 203
- 安藤忠雄 468
- 安藤信正 33
- 飯尾潤 468
- 井伊直弼 33, 47
- 五百旗頭真 468, 469
- 池田勇人 16, 206, 207, 211, 214, 221, 229,  
233, 249, 252-260, 262, 264-272, 275, 280-  
282, 287, 288, 298, 299, 315, 323, 324, 330,  
332, 333, 337, 338, 343, 407
- 池辺三山 62, 63
- 石井光次郎 229, 243
- 石上良平 150
- 石田和外 292
- 石田博英 256, 263, 272
- 石野信一 255
- 石破茂 489, 496
- 石橋湛山 209, 229, 243, 254, 256, 270, 324
- 石原莞爾 166, 170
- 石原信雄 6, 388, 402, 403, 408, 430
- 石原伸晃 479
- 石本新六 104
- 板垣征四郎 166
- 板垣退助 38-40, 44, 73, 74, 90, 153
- 一万田尚登 231, 268
- 糸井重里 350
- 伊藤整 230
- 伊藤博文 9, 17, 18, 28, 38-40, 42-44, 53, 54,  
61, 63-67, 70-76, 79, 80, 87, 89-93, 95-100,  
108, 110, 111
- 伊藤昌哉 257, 275
- 伊東正義 354
- 伊東巳代治 95, 96
- 犬養毅 9, 130, 137-140, 153, 166, 167, 177,  
179, 185
- 井上馨 17, 29, 38, 40, 42-44, 53, 54, 64, 65,  
67, 74, 75, 83, 95, 97, 98, 103, 108, 110, 131,  
411
- 井上準之助 140
- 伊庭想太郎 76
- 今井尚哉 478, 479, 489, 502
- 岩倉具視 34, 37-39, 55, 56, 100
- 岩畔豪雄 174
- ウィルソン (J. Harold Wilson) 261
- 上西充子 504
- 上原勇作 104, 105, 124, 182
- 宇垣一成 159, 165, 170, 187
- 宇野宗佑 387, 401
- 生方敏郎 110

梅棹忠夫 367, 363  
 浦沢直樹 308  
 江木翼 9, 106, 160  
 江田三郎 260  
 枝野幸男 453  
 江藤新平 38-40  
 榎本武揚 35, 43, 50-52, 69  
 汪兆銘 174  
 大井憲太郎 70  
 大内兵衛 290  
 大浦兼武 133  
 大川周明 166  
 大木喬任 38  
 大久保利通 3, 34, 36-42, 56-62  
 大隈重信 9, 37-39, 42-44, 53, 54, 61, 65, 67,  
 73, 74, 83, 90, 97, 106, 129, 131-134, 142-  
 144, 153  
 大野勝巳 231  
 大野伴睦 233, 240, 248, 254, 259, 288  
 大平正芳 254, 258, 267, 280, 296, 318-320,  
 322, 325, 327, 328, 329, 331, 332, 336, 337,  
 339, 343-345, 347-354, 363-365, 370, 372,  
 377, 399  
 大山巖 98  
 岡崎邦輔 151  
 岡田克也 461  
 岡田啓介 168-170, 178, 183, 184, 186  
 緒方竹虎 210, 228  
 岡義武 8-11, 27  
 奥村喜和男 268  
 尾崎行雄 74, 97, 131  
 小沢一郎 384-394, 396, 401-411, 414, 415,  
 420, 426, 432, 435, 436, 449, 451, 463, 464  
 小沢佐重喜 404  
 小淵恵三 386, 390, 396, 401, 402, 416, 419,  
 420, 428, 434-436  
 小和田次郎 →原寿雄

● か 行

海江田万里 473

海部俊樹 387, 389, 403, 407  
 梶山静六 386, 408, 419  
 カーター (James E. Carter, Jr) 326  
 片山哲 203, 204, 213  
 勝海舟 36, 49  
 桂太郎 4, 68, 75, 95-100, 103-106, 108, 109,  
 111, 118, 120, 122-124, 126, 128, 492  
 加藤高明 106, 130-133, 137-139, 153  
 加藤友三郎 135, 148  
 金丸信 352, 386, 390, 404, 406  
 樺山資紀 69, 81, 111  
 賀屋興宣 500  
 河田烈 169  
 菅直人 449, 450, 452, 453, 457, 461, 463,  
 472, 507  
 岸昌 352  
 岸信介 5, 16, 19, 172, 191, 209, 227-234,  
 238, 239, 242-249, 253-256, 258-260, 266,  
 287, 288, 295, 298, 319, 326, 338, 343, 354-  
 356, 359, 425, 500  
 北村滋 489, 502  
 キッシンジャー (Henry A. Kissinger)  
 294-296  
 木戸幸一 165, 168, 173, 174, 186, 187, 189,  
 201, 212  
 木戸孝允 36-38, 40-42, 48, 53-55, 58, 61  
 清浦奎吾 96, 130, 136, 137, 182  
 楠田実 19, 288, 294, 295, 297, 302, 304, 314,  
 315, 325  
 グナイスト (Rudolf von Gneist) 43  
 久米宏 413  
 クリントン (William J. Clinton) 433  
 栗栖越夫 205  
 黒金泰美 254  
 黒川弘務 490  
 黒田清隆 43, 52, 64, 65, 67, 73  
 黒田東彦 479  
 黒田了一 305  
 ケネディ (John F. Kennedy) 258, 280  
 玄葉光一郎 453

小池百合子 484  
 小泉純一郎 416, 417, 419, 421, 422, 424,  
 425, 434, 437-439, 441-443, 462, 497, 504  
 小磯国昭 175  
 高坂正堯 296  
 幸徳秋水 104  
 河野一郎 209, 228, 242, 243, 254, 259, 260,  
 270, 271, 288, 324, 357  
 河野広中 111  
 河野洋平 322, 393, 417, 419, 429  
 神鞭知常 70  
 河本敏夫 353  
 児島惟謙 64  
 後藤象二郎 34, 38, 39, 44, 65-67, 69, 79  
 後藤新平 29, 103, 120, 136, 149, 150, 454,  
 471  
 後藤田正晴 6, 229, 292, 354, 357, 359, 360,  
 373, 375-377, 380, 428  
 後藤文夫 169  
 近衛篤磨 100, 171  
 近衛文磨 10, 28, 165, 171-174, 182, 187-  
 189, 192, 193, 201, 202, 385  
 小林一三 203  
 小松一郎 482  
 小村寿太郎 98, 100, 109, 111  
 小森武 290  
 ゴルバチョフ(Mikhail Gorbachev) 388

## ● さ 行

西園寺公望 4, 9, 29, 97, 100, 101, 103-106,  
 108, 118, 120-124, 132, 134, 137-139, 157-  
 159, 164, 166-169, 172, 178-183, 186  
 西園寺公一 101  
 西郷隆盛 2, 34, 36-42, 49, 54-58, 60, 62  
 斎藤次郎 412, 432  
 斎藤実 106, 167-170, 177-180, 182, 184,  
 186  
 阪谷芳郎 68, 101  
 坂本龍馬 66  
 桜内義雄 352

迫水久常 172  
 佐々木惣一 201  
 佐々木高行 58  
 佐々友房 70  
 佐藤栄作 5, 16, 19, 20, 28, 206, 209, 211,  
 214, 233, 253, 254, 257-261, 267-271, 283,  
 286-288, 291-304, 306, 309, 314, 315, 317,  
 319, 325, 329-331, 333, 337, 338, 343, 368,  
 492, 499  
 佐藤達夫 218  
 里見弴 180  
 三条実美 33, 37, 39, 56, 67  
 サンソム(George B. Sansom) 219  
 椎名悦三郎 320, 322, 324, 327, 339  
 塩川正十郎 327  
 重光葵 5, 163, 164, 198, 199, 209, 228, 229,  
 242  
 幣原喜重郎 137, 198, 199, 201, 202, 212  
 品川弥二郎 69  
 司馬遼太郎 377  
 島津忠義 33, 54  
 島津斉彬 32, 36  
 島津久光 33, 36, 37, 47, 58  
 嶋中鵬二 253  
 下河辺淳 272, 306  
 下村治 251, 252, 255  
 シュタイン(Lorenz von Stein) 43  
 シュネー(Heinrich A. Schnee) 151, 152  
 蒋介石 166, 173  
 庄司薫 307  
 正田美智子 226  
 昭和天皇 2, 144, 165, 168, 170, 178, 181,  
 186, 189, 195, 201, 206, 234, 387, 397  
 ジョンソン(Lyndon B. Johnson) 287, 294  
 菅義偉 480, 486, 489, 490, 495, 496, 502,  
 507, 508  
 杉田和博 502  
 鈴木貫太郎 212  
 鈴木喜三郎 139, 159, 167, 179  
 鈴木俊一 291, 352, 362, 365, 368-370

鈴木善幸 288, 327, 353-357, 363, 370-372, 349  
 鈴木貞一 500  
 鈴木茂三郎 227, 240  
 仙谷由人 453  
 曾禰荒助 96  
 園田直 327

## ● た 行

大正天皇 132  
 高橋是清 135, 137-139, 143, 150, 168, 170, 184, 186, 435  
 高島通敏 366  
 竹下登 327, 354-356, 383, 385-387, 390, 396-401, 404, 405, 407, 416, 417, 419, 420, 425, 428-430, 434-437, 444  
 竹中平蔵 423, 439, 440  
 武部勤 449  
 武村正義 6, 23, 29, 306, 352, 365, 366, 385, 391-393, 407-412, 414, 417, 431, 432, 461  
 伊達宗城 34  
 田中角栄 258, 260, 288, 289, 296, 306, 315, 317-320, 322, 323, 326-334, 336-340, 342, 343, 347, 348, 359, 367, 373, 377, 378, 386, 400, 405, 410  
 田中義一 130, 131, 137-139, 159, 179  
 田中耕太郎 116, 117  
 田中不二磨 69  
 田中真紀子 422  
 田中六助 327, 377, 380  
 谷垣禎一 449, 478, 489, 496  
 田原総一郎 413  
 チャーチル(Winston Churchill) 174  
 張学良 166  
 津島寿一 200  
 堤清二 10, 350  
 坪内逍遙 115  
 寺内寿一 170, 187  
 寺内正毅 121, 133  
 土井たか子 384, 401, 402

東郷平八郎 114, 182  
 東条英機 165, 174, 189, 191, 229  
 徳川家達 35  
 徳川斉昭 32  
 徳川慶喜(一橋慶喜) 33, 34, 47, 48  
 徳大寺公純 100  
 土光敏夫 363  
 床次竹二郎 137, 159  
 ドッジ(Joseph M. Dodge) 207, 208  
 トランプ(Donald John Trump) 483, 484, 496  
 鳥谷部春汀 96  
 豊田貞次郎 174

## ● な 行

永井柳太郎 171  
 中内功 289  
 中島知久平 171  
 長洲一二 352  
 中曽根康弘 288, 317, 320, 335, 339, 353-364, 369-380, 383, 385, 396, 399, 403, 422, 439  
 永田鉄山 170  
 長富祐一郎 351  
 鍋島直大 54  
 難波大助 136, 150  
 二階堂進 355, 356, 359  
 ニクソン(Richard M. Nixon) 287, 295, 296, 309, 313  
 西尾末広 205, 260  
 西田税 166  
 蟻川虎三 289  
 野田佳彦 449, 457, 472, 478  
 野中広務 6, 386, 393, 413, 414, 420, 429, 434  
 野村吉三郎 174  
 野村靖 73

## ● は 行

萩原延寿 260, 272

- 橋口収 210  
 橋下徹 474  
 橋本龍太郎 386, 387, 389, 419, 421, 428,  
 433, 434, 436, 438, 462  
 畑俊六 165, 173  
 羽田孜 386, 394  
 秦野章 290  
 鳩山一郎 160, 199, 200, 202, 209, 213, 225,  
 227-229, 236, 239, 242, 243, 256, 287, 453  
 鳩山由紀夫 451-453, 457, 461, 463, 464  
 馬場恒吾 9, 114, 135, 140, 147, 149, 156  
 浜口雄幸 130, 131, 137-140, 153  
 浜田国松 170, 187  
 浜田幸一 353  
 林銑十郎 166, 169, 170  
 林芳正 479  
 原敬 9, 18, 76, 97, 100-106, 118, 122, 123,  
 129, 130, 132-135, 138, 143, 146, 159  
 原田熊雄 29, 157, 158, 167, 180, 182, 183  
 原寿雄(小和田次郎) 304  
 原彬久 248  
 ハリス(Townsend Harris) 32, 47  
 ハル(Cordell Hull) 174  
 ビアード(Charles A. Beard) 136  
 東久邇宮稔彦 200, 212  
 一橋慶喜 →徳川慶喜  
 平賀潤二 253  
 平田敬一郎 268  
 平田東助 96, 103  
 平沼騏一郎 167, 172, 188  
 平野力三 204  
 ファイン(Sherwood M. Fine) 205  
 深沢七郎 253  
 福岡孝弟 48  
 福沢諭吉 41, 43, 49  
 福田赳夫 231, 232, 255, 259, 288, 317-320,  
 322-332, 337, 339, 343-347, 349, 351, 352,  
 354, 355, 363, 425  
 福田康夫 417, 422, 423, 425, 426, 439, 443  
 福永健司 367  
 福本邦雄 327, 386  
 藤井治芳 358  
 伏見岳人 122  
 ブッシュ, G. H. W.(George H. W. Bush)  
 388  
 ブッシュ, G. W.(George W. Bush) 422  
 船田中 322, 324  
 古川元久 453  
 古川ロッパ 10, 174  
 ブレイディ(Nicholas F. Brady) 389  
 ペリー(Matthew C. Perry) 1, 31, 32, 46,  
 50  
 ホイットニー(Courtney Whitney) 216  
 星亨 9, 65-67, 70, 71, 74-76, 80, 91-93  
 星野直樹 172  
 細川護熙 305, 352, 368, 384, 385, 391-394,  
 408-413, 415, 438  
 堀切善次郎 202  
 保利茂 322, 324
- ま 行
- 前尾繁三郎 267, 343, 346  
 前原誠司 449, 453, 462  
 マーカット(William F. Marquat) 207  
 牧野伸顕 36, 148, 157, 167, 186, 203, 219  
 真崎甚三郎 169, 170, 185  
 升味準之輔 132, 157, 238, 286  
 松岡洋右 174  
 マッカーサー(Douglas MacArthur) 197,  
 201-203, 206, 212  
 松方正義 43, 44, 64, 66, 69, 73, 80, 87, 89,  
 90, 98, 105  
 松下圭一 226, 290  
 松平慶永 33, 34, 47  
 松田正久 97, 100, 103, 104, 118, 122  
 松本剛吉 138, 158  
 松本烝治 201, 202, 216, 218  
 三浦梧楼 72  
 三木清 10, 194, 455  
 三木武夫 203, 254, 318, 320-326, 329-332,

336, 339, 340, 343, 346, 347, 349, 351, 352, 359  
 三木武吉 209, 227, 228, 240  
 御厨貴 468-470  
 水田三喜男 227  
 三谷太一郎 2  
 三塚博 390  
 美濃部達吉 169, 201  
 美濃部亮吉 290, 295, 305, 368  
 三宅雪嶺 114, 118  
 宮沢喜一 6, 207, 221-223, 254, 255, 265-267, 269, 296, 326, 355, 356, 370, 372, 383, 387, 390, 393, 396, 397, 407, 408, 413, 419, 435  
 宮沢俊義 201  
 宮沢洋一 480  
 ムッソリーニ(Benito Mussolini) 164  
 陸奥宗光 65, 66, 69-73, 79, 84, 87-89  
 村山富市 392, 417-419, 429, 430, 433, 461  
 明治天皇 18, 35, 79, 86, 96, 104, 105, 144  
 毛利敬親 36  
 毛利元徳 54  
 元田肇 151  
 本野盛幸 302  
 森恪 160, 166, 167  
 森永貞一郎 255, 268  
 森喜朗 420, 421, 436

● や 行

谷内正太郎 480, 489, 496, 502  
 山内豊信 34  
 山内豊範 54  
 山県有朋 11, 17, 18, 27-28, 43, 44, 64, 65, 67-69, 74, 75, 79, 80, 87, 89, 91, 93, 97, 98, 105, 108, 111, 121, 124, 126, 128, 130, 131, 133, 135, 159  
 山崎猛 206  
 山崎正和 363  
 山田久就 231  
 山田風太郎 198

山花貞夫 392  
 山本権兵衛 105, 106, 131, 136, 148  
 山本達雄 104  
 屋良朝苗 19, 20, 25, 295, 312, 313  
 湯浅倉平 172, 173  
 由利公正 48  
 吉国一郎 30, 321, 340, 341, 343, 375, 380  
 芳沢謙吉 167  
 吉田五十八 219, 245  
 吉田健一 175  
 吉田健三 207  
 吉田茂 5, 27, 28, 170, 175, 198-200, 202-204, 208-212, 214, 218-222, 231, 233, 239, 241, 242, 253, 259, 260, 264, 267, 270, 271, 287, 288, 298, 338, 357, 425, 492, 494  
 吉田松陰 36  
 吉野作造 8, 9, 151  
 吉本隆明 350  
 米内光政 172, 188

## ● ら 行

李鴻章 71, 87  
 レーガン(Ronald W. Reagan) 354, 360, 374  
 蠟山政道 194  
 ローズヴェルト, F. D.(Franklin D. Roosevelt) 174  
 ローズヴェルト, T.(Theodore Roosevelt) 99, 112

## ● わ 行

若泉敬 295, 309, 310, 312  
 若槻礼次郎 137-140, 153, 182  
 我妻栄 244  
 渡辺昭夫 404  
 渡辺国武 70, 73, 76  
 渡辺錠太郎 170  
 渡辺美智雄 390  
 和田博雄 204



日本政治史講義——通史と対話  
*Japanese Political History: Lectures and Dialogues*

2021年5月20日 初版第1刷発行

著 者 御 厨 貴  
牧 原 出

発 行 者 江 草 貞 治

発 行 所 株 式 会 社 有 斐 閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03) 3264-1315〔編集〕

(03) 3265-6811〔営業〕

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社精興社/製本・牧製本印刷株式会社

© 2021, Takashi Mikuriya and Izuru Makihara. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-14937-3

**JCOPY** 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。